

この世界でそれはアカン

榎 樹

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

対魔忍＆貞操観念逆転世界に転生して、ちんぽ狙われる話。

注意

- ・エッチなシーンはかなり少なめ
- ・読者が思つてるような逆転世界じやない確率が高い
- ・男女比はそれ程までに偏つて無い
- ・多大なるキャラ崩壊
- ・一部、T Sする・・・・かもしない
- ・他作品の技を参考にしています
- ・ハーレムタグがありますが、大して機能しないと思われる
- ・作者は対魔忍RPGしかプレイしていないので時系列のミスなどが多発します

目 次

世界は今日も狂つてゐる	116
やつぱり対魔忍は対魔忍	100
媚薬と惚れ薬は紙一重	89
友達以上恋人未満	72
エロ本	63
試験勉強	38
勘違い	16
達郎の献身	1

世界は今日も狂つてる

「お、おお、おおお、お♡♡」

「ん、ほお、おお、お♡♡」

響き渡る嬌声。その正体は歪な化け物・・・オーケに犯され、快楽に喘ぐ者達の嬌声。因みに男の嬌声である。

どういう状況かつて？

雌のオーケに人間の男二人が犯されてんだよ。言わせんな、虫睡が走る。俺？俺は天井裏で気配消してジツとしてる。助ける気は無い。嫌だよ、下手して捕まりたくないし。

「げへへっ、やつぱ若い男は元氣でいいなあ。ほら、孕ませてやるからもつと勃たせろ」

「お前ら対魔忍なんて、孕ませ棒になる為だけに生まれて来たんだよ！生意氣に逆らつて・・・自分の立場を分からせてやるよお！」

「いやあ、あ♡オーケなんて孕みたくない♡嫌なのにタマタマが赤ちゃんの素作つちやうによおお♡♡」

「ほお、お、お♡♡ご、ごめんなしやいい♡恋人居るのにオーケマソコに負けちやう淫乱ちんぽでごめんなしやいい♡♡」

野太い声で酷いセリフを揃つて吐く汚物共。・・・味方だけど、もう纏めて殺そうかな。本当に嫌だ。なんなの、この世界。俺に厳し過ぎるでしょ。せめて、性別の立場を逆にしてよ。寧ろ、そつちの方が自然じやん。・・・いや、この世界だとこれが普通なんだろうけどさ。

「い、イグウウウウ♡♡オーケに種付されちやううう♡♡」

「あああああ♡♡搾り取られりゅうう♡♡」

あ、揃つてイツたな。そんじや、脇差しの切つ先をそちらに向けて天井裏から、水遁で刃を形成して・・・・グサツグサツと。

「？・・・・・ぐはつ？」

「？・・・・・ゞほお？」

二体のオーケが訳も分からず死んで行つた。
ふむ・・・・・特に動き無し。一応、ガスマスクをして飛び降りるか。

「うつ・・・なんかモワツとしてる・・・」

きつと、マスクを外せば咽せ返る程の性臭が部屋を覆い尽くし、転がるオーケの死体からちんぽが抜けて、気持ち良過ぎたのか、それとも現実を受け入れられなかつたのか、理由は分からないが失神している殆ど裸同然まで破けているピツチリ全身タイツの男二人。

股間にある粗チンは尿道がぐつぱり開いて、中から白い液体が・・・・・これ以上はやめよう。

生理的に出来れば、このまま放置したいのだがそうすると怒られかねないし、後味悪いので水遁で綺麗にしてから一人を担ぎ、早急にこの場から撤退する。

今回の任務は偵察。ターゲットが魔の者と関わりが無いかを調べるだけの簡単なお仕事の筈だつた。しかし、目の前で行われた悪行に我慢ならなかつたこの二人が飛び出して返り討ち。

初体験がオーケというなんとも憐れな結末を迎えてしまつたのだ。そう言えば、片方は恋人が居るつて言つてたな・・・・・うわ、めつちや可哀想。あ、彼女の方がね。

オーケまんこでヨガつてコイツは死ねばいいと思う。

「おつと、危ね」

廊下を走りながら、空気中の水で光を屈折させて廊下の角を見たら敵さんが歩いていた。隠れ場所が無いので同じ要領で自身の周囲を

屈折させて姿を消す。

よくよく見たら見破れるような拙い物だが・・・まあ、なんとかなるだろ。

「さて、あの対魔忍とやらの牡豚オナ口の調子はどうだ?」

「オーク達に夢中で腰を振つておりました。商品としてはもう充分かと」

「ぐふふつ、そうかそうか。ならば、私も少し遊んでみるか」

目の前を荒地の魔女並みに太つた不細工でケバいおばさんとゲス顔の女性が歩いて行き、俺には全く気付いていない。

この二人が話しているのは俺が抱えているこの二人の事。それから、『オナ口』つてのは『オナニーロッド』の略で個人的に馴染み深い物で言うと『オナホ』の女性バージョン。

最初、聞いた時はメルヘンな道具かと思つた。真逆の代物だつた。夢をぶち壊されたね。本当、そんなおぞましい物を作ろうとする奴らなんて死ねばいいのに。

そんな訳で脇に担いでいる片方の男を静かに下ろして、脇差を抜く。そして、彼女らの首元目掛けてその場で横に一閃すると水の刃が飛んで行き、二人の首と胴体は綺麗にバイバイした。

「変態死すべし。慈悲など吐いて捨てろ」

さて、ターゲット殺しちゃつたけど証拠も持つてると、どうせ殺す命令が追々出るだろうから、別にいいや。そんな事よりもまずは脱出からだ。



この世界は感度3000倍で有名な対魔忍の世界だ。俺はその世界に転生した。忍法とかは普通に使えるから良かつたよ。身体能力

も対魔忍らしいものだ。

だけど、世界の方に問題があつた。なんで貞操観念が逆転してんだよ。いいよ、そういうの。誰一人として求めてなんかいないよ。

でもさ、それでも最初はなんとか希望を見出して、頑張ろうとしたよ？それなりに対魔忍として頑張ろうとしたんだよ？

ただでさえエロゲの世界なのに、加えて貞操観念が逆転してんだ。ドスケベな女の子とズツコンバツコン出来ると思つてさ、この仕事もいい物だつて思えるような所を探そうと頑張ったよ。

でもね、ある時気が付いたんだ。あれ？玉が無えな？って。いや、結構最初の方で気付いてたけどさ、怖くて無視してたんだ。でも男の子の日・・・所謂、女の子の日みたいなものが来てからは受け入れたよ。

なーんで男が女みたいな立場なのか？簡単さ、子供を孕むのが男の方だからだ。孕ませるんじゃない、孕むんだ。

きんたま、あるじyan?今は無いけどさ。引っ込んでるんだよ、中に。股間には棒だけぶら下がつてる感じ。じやあ、なんで仮拠点の床で氣絶してるこの馬鹿共（さつき救出した奴らね）は『タマタマ』とか言つたのか。

赤子の製造過程を説明するとだな。女性で言う所の卵巣とか子宮があるじyan?あれが男のちんぽの奥の方にあって、そこに女はまんこの中にある細い棒みたいな物・・・卵管を尿道に突つ込んで卵を産み付けるんだ。そして、それに男の体内のキンタマで生成した精子をぶつかける。

女性の身体構造も不思議でな。まんこはあるんだよ。いや、この場合はちんぽが無いと言うべきか？まあ、兎に角きちんと穴があつて、セックスは傍から見たら前世のように男が女に突つ込んでるような状態になる。

だが中身は真逆。女性の前世で言う子宮口辺りから生えてるらしい細い棒状の物である卵管が尿道に侵入して、そのままちんぽの奥に卵を産み付ける。

おお、神よ。どうしてそんな頭のおかしい性行為へと進化させてし

まつたのか。もうそれ、元の世界の男と女でいいじやん。態々、こんな複雑な作りにする必要無いじやん。

・・・・・いや、うん。利点はあるんだ。それは分かってる。

まず一つ目、突つ込み突つ込まれてるから、女は性行為中に男を逃がす確率が減る。まんこで締め付けて更に卵管を脆い尿道へと突っ込むから、男の方は下手に暴れられない。

二つ目は妊娠確率が馬鹿みたいに高い。前世と違つて、完全にゼロ距離。きんたまが子種を作つてブチ撒ける部屋に卵を産み付けるから、殆どの子種が卵子の殻を突き破つてほぼ確実に妊娠する。

しかし、男の方は最初はマジで痛いらしい。初体験でオークのなんて突つ込まれたら失神するぐらいに。コイツら? コイツらは薬とかで改造された後だつたから、割とすんなり受け入れてたよ。淫乱ちんぽだな。

続いて男の子と女の子の日について。女の子の日はその棒の方のまんこから、機能しなくなつた卵子を捨てる日だ。この辺は変わらないが前世と違つて、鳥みたいに朝起きたら股間辺りの空間に卵があつて終わりだそうだ。

割りと潰れてたりするそうだが、前世みたいにダルいとか痛いとか血が出るとかは全く無くて、男で言う夢精みたいなものだと思う。体験した事が無いから知らん。

続いて男の子の日についてだ。子種を孕む孕まないに関わらず、毎月少なからず精子を生成している。生成してる時は勃起がサインだ。そして、無駄になつたそれらを捨てる日となる。

もうね、本当にクソみたいな日になる。腹は滅茶苦茶痛いし、尿だつて中々出ないし、ホルモンバランスが悪くなるからなのか、気分も最悪になる。しかも、俺は人一倍子種の量が多いからなのか、期間が一週間も続く。

長過ぎだろ。他の連中は長くても三日、かなり性欲が強いヤツでも五日だぞ? なんだよ、一週間つて。しゃつちゅう確かに初中後勃起してることさ。仕方無いじやん。実態はどうあれ、対魔忍の見た目がドスケベなのは

変わらないんだから。

後、なんで道が一本しか無いんだよ。女性だつて、尿道と膣の二つあつただろ。絶対にこの辺は設計ミスだつて。

さて、説明も今は終わり。現在地は絶対にこうなるだろうな、と予想して近くに用意していた仮拠点のホテル。荷物整理し終わつたが未だに眠りコケてる馬鹿共を起こすか。

「…………おい、いい加減に起きろ」

水遁で頭の上から水をバーッと掛けて、無理矢理起こす。すると、慌てて起きた二人が辺りをキヨロキヨロと見渡した。

「…………あ、あれ？…………ここは…………」

「俺達…………何をして…………」

「おい、起きたんなら早く行くぞ。ボサツとすんな」

記憶が混乱してるみたいだが都合が良い。薬も抜けてるみたいだし、今は思い出させない方がいいだろう。下手すれば精神崩壊する。この世界の男は精神がクソ雑魚だから。

…………まあ、忘れているどうこうに関わらず、ちんぽの穴はエラい事になつてるがな。

「…………あ、ああ…………って、任務はどうなつた!?」

「俺ら…………アイツらを倒そうとして…………それで…………」

「任務は完了。ターゲットも殺した。俺達がやる事はもう何も無い。早く撤退するぞ」

クツソ、コイツら本当に早くしろよな。ここだつて、いつ見つかるかなんて分からんんだから。またオーケの孕み棒になつても知らんぞ。

記憶が混濁したままの二人を連れ、無事に帰還。報告は俺がするから保健室に行けとコイツらには命令を出しておいた。思い出したりなんなりするのはそつちでやつてくれ。連絡は入れとくからさ。ん？ コイツらが孕み棒になる前に助けなかつた理由だと？ そんなモノ、確実性を上げる為だ。絶頂した瞬間が一番無防備になるからな。

：：と言うのもあるのだが、實際は試したい事があつたからだ。それは俺の使用する水遁の術を応用した避妊。産み付けられた卵を水で洗い流すというものだ。

一応、アイツらが気絶してる間に出来たと言えば、出来たんだが：：完璧とは言い難い。何せ、初めての試みだ。女性が中につけるコンドームがあるが、裏世界で使う者なんて居たとしてもプレイの一環くらいだ。基本的にまず産み付けられる。

そうすると後はアフターピルのような薬くらいしかこの世界には後付け出来る避妊具が無く、もしもの時は孕むか流産させるしかない。そんな事態にならないのが一番だがこの世界だと割と当たり前に起ころるからな・・・準備しておくのに越した事は無い。

「・・・と、言う訳で殺しました。こちらがその証拠です」

「・・・まあ、いいでしょう。ご苦労様です。・・・どう？ 任務には慣れて來た？」

今、目の前に居るのは対魔忍を育成する学校である『五車学園』の校長『井河アサギ』であり、どんな人かを簡単に説明すると生きる伝説みたいな人だ。

質問の意味はそのままで、俺はまだ学生の身だが実力を買われてこうして学業の傍らに簡単な任務を熟すようになった。

簡単だがチームメンバーが正義感の強い脳筋ばかりなのでもう少し大人しい者と組ませて欲しい。それか単独で。

「駄目よ」

と、言つてみれば、この様な一言を返された。

「・・・何故です？」

「・・・それより、仮面を取つたらどうなの？」

「すみません、この仮面の下は酷い火傷を負つておりまして。到底、他人様に見せられる様な物では無いのです」

「・・・不知火にそんな事は一度も聞かされた事は無いのだけど」

「行方不明の後の話ですので」

「・・・前は普通だつたでしょ」

「はて、そうでしたつけ？」

「・・・そんなに信用無い？」

「はい」

目に見えて落ち込む校長。この反応の理由は俺の格好にある。対魔忍特有のピツチリスースの上から、原作で『秋山達郎』が着ていたような身体のラインが分かり難い衣装を着ている。そして、顔にはガスマスク。

これは恥ずかしいとか、そんな女々しい理由では無く、きちんととした理由がある。まず服装について。前世の男の対魔忍は反応する素振りはあんまり無かつたが、こつちの女はヤバい。酷い奴で他人様の股間を悪びれる様子も無くガン見していく。

そう、この世界の女性は前世の男よりも性欲が強く、そして厄介な事に割と正直なのだ。しかも、俺はかなりエロい体型らしく、例えば任務とか訓練中とか女性メンバーの気が散つて仕方無い。それで発情して寝込みを襲われたら堪つたモノじやない。

それから俺自身にも問題がある。中身がこんなだから、この世界の男女関係を知つても普通にエロいなーと思つて勃起してしまう。

するところのピツチリ対魔忍スースだとそれが丸分かりで、相手からしたら誘つてるように見える。それで襲われ掛けたというのが後を絶たない。

仮面は単に美形だからだ。それだけで襲われる。本当、イケメン羨ましいとか美人に産まれて人生楽だろうなー、とか思つてごめんなさい。俺が間違つてた。やっぱ、人生普通が一番だ。

校長の前で失礼じやないかつて？権力あるからつて無遠慮にジロジロと覗姦したり、舌舐めずりをする方が悪い。おい、お前だよ井河アサギ。他人様の股間を凝視して来た奴筆頭は。

「それでは自分はこれで」

「・・・ええ、もういいわ。暫くは任務は無いだろうから、ゆっくりと勉学に励みなさい」

意氣消沈した校長を置いて、さつさと退出する。すると少し歩いた所で背後から何かが覆い被さつて來た。

「だ～れだ？」

頭を柔らかい何か・・・まあ、おっぱいなんでしょうけど。中々の巨乳に包まれ、顔全体を抱き締めるようにして視界を塞がれた。割と頻繁にやられるこの行動。本来なら普通にセクハラらしく、犯罪だ。因みに捕まるのは女の方。しかし、俺にとつては役得であるし、何がセクハラなのかもよく分からぬ。

理由としてはこのおっぱいらしい。胸が大きい＝卵管も大きいという方程式が成り立ち、前世で言うと相手の後頭部にちんぽ擦り付けてる状態なんだとか。

・・・・・あれ？これだとちんぽ擦り付けられても許しちゃう俺が何故か変態みたいだな。・・・今度、校長にチクるか。

「・・・校長に密告しますよ、さくら先生」

「またまた～♪ そうやつて公言してる時点でそんな気が無いのは分かつてるよ。んもう、ムツツリさんなんだから♪」

「・・・・・・・」

人の親切心に漬け込んで更に強く抱き締めて、胸をスリスリと擦り付けて来る。この変態、無駄に実力だけはあるから腹立たしい。

おい待て。なんか、息遣いが荒くなつてるぞ。なに興奮してるんだこの変態は。

「んつ♡・・・ふう♡ねえ、今夜空いてない？先生が特別な課外授業

を・・・」

「・・・さくら」

「ツ
!!」

背後から背筋が凍るような低い声が聞こえた。見なくとも頭にイメージが浮かぶ。般若顔の校長だ。さつき、水遁で助けを呼んでおいたのだ。

さくら先生はパッと反射的に手を離して降参するように両手を上げる。そして、その隙に俺は退散。

「・・・・・・」

「・・・お、お姉ちゃん・・・あはは・・・・・ただいま」

「・・・おかえりなさい、さくら。貴女がナンパする程に無事みたいで何よりだわ。そんなに元氣があるなら、追加で任務を出しましょうか？」

？

「え、えーと・・・い、いや～薬の効果が切れたみたいで・・・ちょっと苦しいから慰めて貰おうかなー・・・なんて」

「・・・・・・覚悟は出来るわね？」

「くつ・・・なら！お姉ちゃんはエロい目で彼を見てないって言うの!?どうせ権力に物を言わせて、好き勝手してるんでしょ!!」

「・・・・・・」

「さつきだつて、彼を呼び出してきっとエロい目で見定めてたに違いないわ！」

「・・・・・・さくら」

「それに今も私と彼がイチャイチャしてゐるのを見て、おまんこグショグショにしてるんでしょ?!」

「……さくら……その彼、もう居ないわよ」

「え?でもここに……あ、これ幻影だ」

「……い、いや……覚悟は出来るわね?」

「……い、いや……にやはは……一体なんの事がさっぱり……逃げるが勝ち!」

「そんなに甘くないわ」

「んにゃー!鬼畜ババア!!」



悲鳴が聞こえたので速度を緩めて歩く。の人、影に入るからこうして逃げてもあんまり意味無いが、校長が捕まえてくれていれば、なんとかなるだろ。実力だけは半端じやないし。

「…………まあ、まだマシか」

廊下を歩いているとすれ違う人達に凝視される。大方、マスクを見て驚いているんだろ。結構前から種類は変えてたりしているが着けていたので慣れられると思つたんだが、そうでも無いらしい。

身近な友人は確かに慣れたがこうして学園全体を見るとまだまだ浸透していないみたいだ。まあ、性欲を滾らせられるよりはマシだが。

「あ……」

向こうから見知った人物と目が合つた。名を『秋山達郎』という忍法が使えない対魔忍であり、皆さんご存知の通り、寝盗られキヤラだ。この世界ではどうなるか知らん。まだその時期じゃないみたいだし。因みに俺の名前は『水無瀬 秋水』だ。下の名前は呼び難いから、

皆苗字で呼ぶ。名前を呼び合うような仲の奴は少数だが・・・。

「しゅうー！」

突然、達郎の背後から彼を追い越して飛び込んで来た弾丸を腰を落としてキヤツチ。そのままグルグルと回つてストンと元の方向に向かつて降ろす。

身軽そうに着地したのは雷撃の対魔忍として既に名を馳せている『水城ゆきかぜ』という次期エース候補筆頭の凄い子。はい、こちらもご存知の通り、達郎の彼女で将来的にはNTR要員となる不憫な子。

今は彼女の家に居候させてもらつてる。関係性を言うと友達以上家族未満みたいなもの。恋人では無い。兄妹の方が近いかな？

恋人はトコトコと歩いて来てる達郎だ。もうこの二人は恋人になつてるぞ。

「任務終わつた？どうだつた？」

「んー・・・まあ、任務は達成した。一人程、ちょっと病院送りになつたけど

「え、何か怪我でもしたの？」

「いや、精神病院の方」

「・・・・・・？」

首を傾げる純情Y豚ちゃん。うん、君はそのままで・・・・だから騙されて娼婦堕ちしたのかな。仮にそうだとしても俺はきっと家族で居るよ。

こんなお面野郎にもなんの偏見も無く近寄る良い奴なんだから。・・・まあ、家族で居るだけで関わるかは別問題だけど。だつて、そのまま性に開放的になつたら俺まで襲われ兼ねないし。

「・・・相変わらず、仲良いな」

「・・・おい、俺に対して嫉妬を抱くな。虫唾が走る」

「そうよ、達郎。ただの家族のスキンシップよ」

ジト目で睨んで来る達郎に揃つて説得すると何故か更に睨まれた。
コイツ、こんなに嫉妬深かつたっけ?

「ゆきかぜは僕のモノだ」

そう言つて、俺から奪うようにゆきかぜを抱き締める達郎。俺は寝
盗る気なんて全く無いし、互いに性的な目で見ていないんだが……
居候だからか、かなり敵視していく。

どれだけ言つても分かつて貰えないの俺もゆきかぜも説得は形
だけで既に諦めているが、それでも面倒ではある。これでも昔は懐か
れてたんだがなー。

・・・男に好かれても嬉しくないな。

「分かつたから、取り敢えず離してやれ。色々と限界みたいだぞ」

「え?・・・あ、ごめん、ゆきかぜ。苦しかった?」

「ふえ?・・・ツ?!い、いや!な、なんでもないわ!うん、なんでもな
い!」

「?・・・どうしたんだ?顔が真つ赤だぞ?」

「だ、大丈夫!ちょっと・・・うん・・・そのお・・・」

「??」

・・・何を見せられるんだろうか。これが男女逆だつたら、もう
少しはマシだつただろうに・・・・・ああ、この世界がどういう物
かを突き付けられたようで最悪な気分だ。

廊下を歩く女生徒が凄い目で見てくるし・・・・・これ、元の世
界だと美人幼馴染みに取り合いかれてるハーレム状態つて事だよ
な。・・・片方仮面の変人だけどさ。



水無瀬 秋水

親は殉職し、幼いながらも天涯孤独の身となつた彼を名門水城家がその能力に目を付けて引き取つた。そこで彼はメキメキと実力を伸ばし、水城家のご息女であるゆきかぜ同様、次期エースとして注目される事になる。

しかし、注目されるのはその能力だけでなく、幼くも美しいと感じさせる程に完成された容姿。当時の水城家当主である水城不知火が我を忘れて襲う程の魔性さ。幸い、水城家の執事がこれを阻止する事に成功し、大事には至つていなし、この話は当人達しか知らない。（因みにこの次の日に不知火が行方不明となり、執事が自責の念に駆られているのはまた別のお話）

その実力を買われ、まだ十を超えたばかりでありながらも任務へ赴き、任務成功率は八割程であるものの生還率は百パーセントという実績を残している。しかし、その反面で心に傷を負つたのか、最低でも顔を完全に隠せる程の仮面を装着し始める。

本人は女装の一環で肩まで濡れ羽色の髪を伸ばしているが何処からどう見ても身体がエロいので全く誤魔化せていない。同様に服装もラインが分かり難い服を羽織つてるつもりではあるのだろうが、緩いからこそ隙間から見える対魔忍スーツがエロいと評判。隠れフエチが急増した。

鎖骨の辺りとかもう最高、とはよく彼にセクハラをしているさくら先生の談である。

こうまで対策しているのに何かと無防備な所が目立つのがタチが悪い。例えば、学校の制服だと暑いからと言つてボタンを第二まで開けたり、ちよつとやそつとのスキンシップなら普通に許してくれたりなど、年頃の女子を悶々とさせている。

これといった被害が彼に及ばない理由の一つとして、雷撃の対魔忍水城ゆきかぜの存在が上げられる。

普段から抱き着いたり、胸に顔を埋めたりと好き放題に彼を堪能しているゆきかぜ。おまけに彼が居候していると来た。そしてトドメ

に彼とは別に美形な彼氏持ちである。

ゆきかぜが、かーなーり学園中のヘイトを集めているお陰で水無瀬に矛先があまり向かないのだ。ゆきかぜ本人もどこ吹く風。

だが在らぬ噂は流れるもの。一人の男を使って毎日楽しんでんだろ、とか噂されているが彼女も彼氏も本当に初心なのでそんな事は無い。水無瀬に至っては忌避している。中学生にもなつて恋人とキスすらまだなのだ。それは高校生になつてかららしい。

幸いなのが達郎が名門なのに未だに忍法が使えない落ち零れであること。これで優秀で人望も厚い生徒だつたら、もう毎日が修羅場になつていた事だろう。

因みに秋山達郎の実の姉である秋山凜子は重度のブラコンであり、勿論ゆきかぜの事も妹のように可愛がっているが裏では物凄い我慢してゐる。もう色々と。

数少ない友人が恋人の姉とギクシャクするのは面倒なので水無瀬が偶にストレスの発散に付き合つてる。内容は明かせないがその次の日はかなりスッキリとした表情になるのだとか。
また変な噂が立つ事は間違ひ無いだろう。

やつぱり対魔忍は対魔忍

あれから数日。なんか任務を言い渡された。上のお偉いさんからの任務らしく、失敗は許されないんだとか。どうして、そんな任務を新米どころか卵の俺に言い渡すのか。

・・・どうせ、失敗したのを理由にそういう要求をしてくるんだろうな。実際、それで何度も迫られたし。

「今日はお願ひします。凜子さん」シユコー

「・・・あ、ああ・・・よろしく頼む」

今居るのは東京キングダムに入る唯一の橋から車で十分くらいの所のホテル。そこに居たのは今回の任務で唯一の救いとなる信頼の於ける達郎の姉の凜子さん。今回の相棒である。

性的な目で見られる事はあるが襲われる事なんて一度も無い。おまけに実力も申し分無い。思つた以上に自制心が強い人だったのだ。だからこの人の努力に報いる為にも俺は今日、プレデーターの兜を被つている。これなら興奮しないだろし、機能面も原作とかなり近いから一石二鳥である。

「・・・どうして、それなんだ?」

「気にしないで下さい」シユコー

「・・・そうか」

早速、作戦会議を行う。今回の目標はお偉いさんのご子息が誘拐されたらしく、その捜索及び奪還らしい。・・・・・絶対に罠だ。この世界のお偉いさんがそんなミスをする訳無いじやん。

誘拐するよりも先に家で調教してくるくらいは普通にするぞ。仮に誘拐されたとしても裏ではそれでお金を得て俺らに回収させてまた売るっていうクソみたいな無限ループを目論んでる。

その場合はこつちまで皺寄せが来るのでさつさと取引先を潰しき

らなければならぬ。これがまた面倒臭いし、かなり危険なお仕事。依頼主を証拠も無く消す訳にはいかないし……。

最近、かなり本気で俺を堕とそうとする奴らが多い気がするのは気の所為だろうか？

「では地図は頭に入っているので俺が捜索を行います。凛子さんは周囲の警戒を」

「任せられた」

心強い返答を貰い、いざ潜入。……なのだが、どうにもやる気が出ない。そもそもなんで対魔忍が一切動いていないのに対象の居場所まで分かつているのか。それを名を馳せてしているとは言え、まだ学生の身である俺らにさせるのか。

人手不足なのは分かるよ。だけど、もう少しその辺の任務は吟味して欲しいね。これだと校長まで俺に墮ちて欲しいみたいじやないか……否定出来ねえんだな、これが。もう対魔忍止めようかな。

「……どうだ？ 見付かったか？」

「いえ、それどころか誰かを誘拐して来た痕跡すら見付かりません。罠の可能性があります。お気を付けて」

「ああ、分かつてる」

見付かる訳無いよ。だって、そもそも居ないんだから。侵入した建物の構造を見て確信してたよ。あ、これ地下に誘い込んで袋叩きにするつもりだなつて。

その辺は凛子さんも分かつてるようで安心だ。これが以前のアイツらだと、「罠な訳あるか！ 情報を信じろ！」とか抜かして慰み者になるんだ。阿呆だな。

居るなんて望みをコレっぽつとも抱かず、地上の階層を一通り調べ

てから地下へと繋がる階段まで到着。地上の方は普通の薬品会社だつた。対魔忍世界で薬品会社。絶対に裏がありますね、これは。

水遁で二人の姿を隠すと凛子さんが自ら先行してくれて、俺は脇差しを構えて後に続く。警備？ そんなものは簡単に無力化出来る。

すると、下には奥へと通じる廊下があり、そこを進むとかなり堅牢そうな扉があつた。凛子さんがゆっくりと扉を開けるが特に反応は無し。

それどころか明かりも点いていないのか、真っ暗だ。もうこの先の展開が読めたので戦闘準備をして中へと入る。て言うか、暗視、ゴーグル機能もあるので普通に見える。

別にここで引き返して居ませんでした、と報告するのもいいがそれだと怒られるので渋々行くしかない。・・・凛子さんは眞面目だからそんな事はないと思うけど。

数歩程歩くと一人でに扉が閉まり、部屋の明かりが点いて眩しいので暗視機能も切る。部屋は一戸建てが立つくらい広いが物が何一つとして無い。

しかし、俺らとは眞反対の場所に一人の小太りしたおばさんと彼女の傍に首輪をして大事な部分だけ丸出しの対魔忍みたいな格好をした三人の男の子が居る。男の子が居る。

股間はビンビンに勃つてるし、顔は発情してる。完全に調教済みですね。

・・・・・うわ、凛子さん目が血走つて。出来れば性的興奮による物では無く、怒りによる物であつて欲しい。・・・うーん、鼻息荒いし駄目みたいですね。俺が会話するか。

もう意味も無さそうなので術を解いてこちらも姿を現す。

「・・・クライアント様が一体何故こちらに？」 シュコー

依頼主であるおばさんにそう問い合わせても返つて来たのはニヤニヤとした薄汚い笑みばかり。あー、はいはい、分かったよ。そういう事でしようね。うん、知つてた知つてた。

「分からぬのかい？騙されたんだよ、あんた達はね！」

どうやつて攻めようかと考えているとどう勘違いしたのか、上機嫌に話しかけ始めた。因みに両手で左右の男のちんぽをシゴいて、一人だけ横になつてちんぽを足で踏んづけられている。

男三人はアンアン喘ぎ、凜子さんはハアハア♡発情して弄りそうになる右手を左手で抑えている。なんだこのカオス。

「そこの変なメツトを被つた対魔忍。アンタ、結構綺麗な顔をするつて噂だよ？そんなエロい格好でこっちを誘つてからに・・・お前さんもこの卑しい豚ちんぽのようになるかえ？」

「おつ♡おひい♡もつと♡もつと強くシゴいてえ♡」

「ご主人様あ♡ちんぽ穴もグチヨグチヨ犯して下しやい♡♡」

「い、ひい、♡♡しゅごいによお♡♡もつと踏んじゆげでえ、♡♡」

なりたくないです。

絵面が酷過ぎだろ。こればっかりは全然慣れねえな。俺ならババアに弄られて喘ぐくらいなら、速攻で自殺してやるよ。あ、でもそれだと死体で弄ばれるな。・・・どうしよう、この世界の住人が変態過ぎて辛い。

「んつ♡・・・ハアハア♡・・・な、なんと外道な！人の心を、尊厳を踏み躡つて・・・ゆ、許せん！」

そんなおまんこをぐしょぐしょに濡らして言つても説得力皆無ですよ、凜子さん。割と日常茶飯事なんだからもう少し耐性を持つてよ。ムツツリか。最後の『許せん！』に至つてはなんか声が裏返つてましたよー。

あ、おまんこを濡らすのは前世で言う所の勃起ね。

「ぬふふつ、さてその威勢がいつまで持つかな？……おい、性奴隸共！嘗ての同胞の女の方は始末し、男の方は私に生きたまま献上しろ。そうすれば、褒美に孕ませてやる！」

うわっ、相変わらず酷いセリフ。それで喜んでこちらに突撃してくる元対魔忍達も色々と酷い。ちんぽがぶるんぶるん撓しなつてる。

コイツらは恐らく、別の任務か何かで奴隸まで堕ちた奴らだな。

最近だと娼館に潜入したのが何人か連絡が着かなくなつたという話を聞いたな。仮にそれがコイツらだとすれば、実力は普通にあるだろうし、今は欲に忠実だから遠慮とかそんな物は全く無い。

こちらも殺す気でいかなければ。

「来ますよ、凜子さん！」

「あ・・・ああ、分かつてる！」

二手に別れて戦闘開始。こちらは踏んづけられてた奴・・・脚野郎としよう。脚野郎一人で凜子さんの方には二人行つた。あちらは丈夫だろから、俺は俺の方で集中しよう。

「ふ・・・ふふつ」

キモつ、何急に笑い出してんだコイツ。しかも身体が笑つて揺れる毎にちんぽが揺れるから殺意の波動に目覚めそうなんですけど。

うわっ、汚ツ！なんかちんぽの先から汁が飛んで来た！？

「君も・・・気持ちよくなろう？」

「断る。お前、今の自分の姿を鏡で見た事があるのか？」

「鏡い・・・？鏡い・・・あるよお・・・何度もあるう♡自分の惨めな姿を何度も何度も何度も何度も!!・・・脳裏に焼き付くくらいに見せ付けられたよお♡♡そして漸く理解したア♡僕はあ・・・僕達男は雌を喜ばす為の道具に過ぎないってねえ!!」

あちやー、こりや完全に心折られてるな。こうなつたら、使えるようになる方が難しい。よし、殺してやるか。

半狂乱になつて脚野郎が迫つて来る。牽制に水の刃を飛ばしてみたが腕を振るうと打ち消され、そのまま突つ込んで来た。

脚野郎の射程範囲内になるともう一度大きく腕を振るい、こちらを攻撃して来た。脚野郎の腕は見るからに力チコチに固まり、脇差で受け止めたが傷は入らず、鎧迫り合いとなつた。

「そうかい。残念だな」

「残念……？ 残念なんかじやないよおゝ寧ろ、本当の自分に気付けてとても幸せなんだあゝ……でもねえ、今は苦しくて仕方が無いんだア」

「苦しい？ そりやまたどうして？」

「だつてえ……ここ数週間、一度もイかせて貰えて無いんだア！ 君達が邪魔しに来るつて言うからあ、ご主人様は忙しくて最後まで相手をしてくれないんだあゝゝお陰でもうこんなにビンビンゝイキたくてイキたくて……もう我慢の限界なんだよオゝゝゝ」

・・・ふむ、そうなるとこの作戦はあるのババアが計画的に行つたという訳だな。言質取れだし、さつきとあの世に送つてやろう。

拮抗状態でガラ空きだつた腹をヤクザキック。腹までは固くしてなかつたのか、腕程に固くは無かつた。蹠^{よろ}走^{よろ}ける脚野郎に向かつて、その場で突きを放つ。

すると剣先から水の刺突が飛び出し、心臓部に向かつて一直線に飛んで行く。直撃すれば、コンクリートなんかはあつさりと碎く威力を持つてるが脚野郎に直撃しても普通に水がバシャツと掛かつたような現象しか起こらなかつた。

強いて言えば、ただでさえ無かつた布面積がもつと減つたくらい。見苦しい事この上無い。

よく見てみれば既に全身が力チコチになつており、攻撃が止んだと

判断したのか、移動に必要な部分は柔らかくなつた。

「どうだい？僕の金剛の術は、身体中をギンギンに出来るだけだが、何かと厄介だろう？そしてこれにはこんな使い方もある」

得意げにそう言う彼は徐に腰を突き出し、その勃起したちんぽを突き出してくる。何がしたいのかよく分からんが隙だらけなのは変わり無い。

斬り落としてやろうと横に回つて、水の刃をちんぽの根元に向かつて飛ばすが——弾かれた。

「はあ！」シユコー

「んふつ♡中々いい刺激だけど、それだけじゃいけない♡♡イケないよオ♡♡もつと♡もつと♡強い刺激を頂戴よおお♡♡」

えーと……だな……。何がどうなつたかと言うと……ちんぽが……力チコチになつた。勃起的な意味では無く、先程の忍法的な意味で。

そして、俺の攻撃が『刺激』程度にしかならなかつたのか、まるで堪えた様子は無く、それどころか両手を後頭部で組んで腰をヘコヘコさせてる。

うん……馬つ鹿じやねえの？なんなんだこの未知の変態は。遣り難いつたらありやしない。

「そんなにお望みなら、もつとくれてやるよ」シユコー
「おひい、い、いい、♡♡」

と、意気込んでみたものの色々と攻撃を放つが効いてる気配は無い。それどころか、連續で刺突した時はあちらも連續で腰をヘコヘコさせて打ち消された。なんか腹立つ。

物凄い変態ではあるが戦闘力は俺より上と見るべきだ。物凄い変

態ではあるが。

「ふ、ふひひい♡無理い♡その程度じゃあイケないい♡イケないよおおおお♡♡」

ある程度受けると我慢出来なくなつたのか、再び動き出した。こちらの攻撃は全く通用しないので脚野郎に防御する素振りは見られない。

だが、理性は殆ど擦り切れているのか、大振りばかりで簡単に避けられる。途中で壁に当たつて豆腐のように粉碎してるので、一撃でも貰えば一溜りも無いだろうから油断は禁物だが。

度々、こちらも反撃してはいるものの、未だに掠り傷一つとして付けていない。俺の水遁つて搦め手は多いけど火力に問題があるよなあ、つて熟々^{つくづく}思う。

「どうしたんだい!! その程度じや! 我慢汁くらいしか出ないよオお♡♡これで手古摺るようななら、ご主人様のおまんこを相手にすれば一撃で堕ちちゃうねえ!! 君のちんぽもきっと雑魚ちんぽなんだろ!!」

「ざ、雑魚ちんぽ!!」

あーもう! 一々訳分からん例えで挑発しやがつて。うるせえな、コイツ。凜子さんも反応して来んな。集中して下さい。

・・・これやると色々と疎かになるけど、もうこれ以上は我慢の限界だ。

「これでえ・・・終わりだよおお!!」

こちらの誘いに簡単に乗り、トドメとばかりに手の指を束ねて鋭い穂先のようにして突き出す脚野郎。その一撃は俺を貫いたかのように思われたが、するりと抜けて後ろの壁に突き刺さった。

「？・・・今のは

「・・・・・」シユコ一

「！・・・後ろか！」

「残念、前だ」シユコ一

背後から近付いた俺の気配を察したのか、即座に引き抜くと同時に後ろへ横薙ぎに振るう。しかし、俺を捉えると同時に俺の姿は搔き消える。

そして、俺はそのガラ空きとなつた背後から両足の膝裏を脇差しで一撫でする。すると今まで斬れなかつたのにあつさりと鮮血が舞い、膝カツクンされたように脚野郎がその場に跪く。ひざまづ

もう一度脇差しを振るつたが弾かれてしまい、再び俺を鋼鉄の突きが突き刺し、俺の姿は搔き消える。

「？・・・何処だ！何処に居る!!」

突然の不可思議な現象に恐怖でもしたのか、辺りを狂つたように見回して俺を探そうとするがその程度では見付けられない。

そのまま脚野郎の首を背後から斬ろうとして、脚野郎の腕が襲つて来た。

「はい、残念」シユコ一

しかし、その腕は俺を捉える事無く宙を切り、またもやガラ空きとなつた脇の同じ場所を一撫でし、腕を斬り飛ばす。

「がつ・・・あ、ああ、あ、あ！・・・う、腕があ・・・！」

だが腐つても娼館に潜入するような優秀な対魔忍なのか。即座に傷口を固めて止血を完了させた。

どうでもいいが、ドMと思つたのだがそうでは無いのだろうか？腕

を斬り落としたから絶頂して隙が生まれると思つたんだがな・・・。

「助言しておくともう固めるのは止めて於いた方がいいよ。どうせ、お前の力では俺を捉える事は出来ないから。そつちの方が早く楽になれる」 シュコー

「くう・・・！」

目の前の手の届かない場所へと姿を表せば、脂汗を浮かばせて苦虫を潰したような顔をしていた。性奴隸へと墮ちても元々顔が整つてるので少しおつかない。

・・・いや、こんな状態でもちんぽギンギンにしてるから、そんな恐怖も吹き飛んだわ。さっさと殺してやろう。

「死ねないい・・・！」このままイケないまま・・・死ぬのは嫌だアあ!!」

「・・・・・」 シュコー

一瞬・・・脚野郎が御涙頂戴のお話をすると思つたら、残つた手でシコシコしだした・・・・・・本当、惨めだなあ・・・。

「・・・・・!？」

「ふ、ふふつ・・・・こうすれば・・・お前は斬れない！」

全身硬化か。動けないようだが、どの道下手に動けない今の状態じや、確かに最善手だな。まあ、それを回避する為に忍法を解けと促したんだが・・・。

「・・・・・なあ、知つてるか？死ぬのつてオナニーするよりも数百倍も気持ちイイらしいぞ？」

「えつ・・・・・♡」

ほい、ザシュツと。

「……はあ、性欲に振り回されると本当に碌な事にならないよな」

頭と胴体が別れて崩れ落ちる脚野郎。気持ち良さそうにちんぽは跳ねまくってるから、きっと願いが叶った事だろう。

さて、凛子さんは…………あれ？まだやつてる。しかもなんか劣勢だぞ。どうしたんだ、あの人？

「あ、気持ちイイ。刀がおちんぽスレスレに通るのしゅごいい。」「んふう。そんなにおまんこぐしょぐしょにしてえ。こつちもおちんぽ準備万端なんだからあ。刀じやなくて、腰をフリフリしよう。」「くつ……うう……なんてエロいんだ！」

「…………」シユコー

うん、大丈夫そうだな。

さて、あのババアは……あれ？居ない。逃がしたか？…………ツ！？いや、違う！

「凛子さん！息を止め——」

「んほお、おお、おおにやにこれえ、え。」

「イグウ、ウ、ウゥゥ、おお、おお、おお。」

「な、なんだ？いきなり男達が…………はつ！ま、待て、秋！私

は何もしてないぞ！」

「…………そつすね」シユコー

本当にアンタ何もしてないつすね。敵二人、自滅しましたもんね。おい、二人の痴態をそれ以上見てやるな。ガン見をするな。おいつて。

……あ、そつか。薬の効果。

「凛子さん——」

「うつ、♡な、なんだツ……これは?!」

「あー……あー……」

顔を真っ赤にして身体を震わせて蹲る彼女に遠い日をしてしまう。これ、後が面倒だぞ……。

『ぬふふつ、聞こえるかな？対魔忍達よ』

突如、室内に響く放送音。声質的にさつきのおばさんだろう。何処からかは分からんがモニターか何かで見ているのか？

「……何をした」シユコ一

『簡単な事よ。無色無臭の氣体状の媚薬をその部屋に散布しておいたのだ!』

「……お前の自慢の奴隸も巻き添えを喰らってるが?』シユコ一

『これはその奴隸を作る為に使用した媚薬を薄めた物だ。ソイツなら耐えられる』

「……いや、めっちゃ効いてるぞ』シユコ一

「……お、♡おお、♡」

「……あへえ、♡」

「……」

『それから俺にはその程度は通用しないぞ。俺の顔を見る。完璧なガスマスクを着けてるだろ?』シユコ一シユコ一

「……」

なんか急に静かになつたな。予想外過ぎて慌ててんのかな。頭良いのか馬鹿なのか、よく分かんねえな。

あの対魔忍達は多分、寸止めさせてたからだよ。裏目に出まくつてんな。

『ええい！性処理としてしか使えない肉便器共め！オーケー!!仕事だ！そ

の部屋に居る者全てを好き放題に犯せ!!』

その声と共に十数秒後に俺らが入つて来た扉とは真逆の壁から、ゾロゾロと十体近くのオーケークが入つて來た。どいつもこいつもいい感じに発情しやがつて、股から液体がダラダラと涎のように垂れまくりだ。

凛子さんは薬の所為で眞面に戦えないし、入つて來た扉は勿論開かない。この狭い空間で動けない人を庇いながら戦うのか・・・。

それに見た感じではあるが、いつものオーケークより一回りか二回り大きいんじゃないかな。恐らく、薬で改造なりなんなりされたんだろう。

う。

前みたいに水の刃でチヨンパとはいかなそうだ。

『ぬふふつ、そいつらは特別性の私自慢のオーケークだ。たっぷりと楽しんでくれ給え』

そう言い残し、放送は切れた。しまつた、任務失敗だなこりや。それより、生き残る事だけを考えるか。どれだけ強化されてるか分からぬから、最大限の警戒をするべきだ。

◇

「はあ・・・！はあ・・・！」シユコー

「「「グルルルウウ!!」」」

半分殺せた頃にはこちらも満身創痍。プレデターの兜は無傷だが少し息苦しい。だが感知するに薬が今も充満してゐるから、外す訳にも行かない。

本来のオーケークなら、この程度の数なんか瞬殺出来るのに・：クソツタレ、固過ぎなんだよ。水の刃を同じ所に十発放つて漸く一体倒せるとか巫山戯んな。そんなんオーケークじやなくてオーガクラスじやねえ

か。

「お、・・・♡おお、・・・♡」

凜子さんはもう立ち上がる事すら出来ないみたいだし・・・ぐぬぬ、工口いなあもう。あー！こんな身体じやなかつたらー！

この人、胸デカイから絶対に卵管も大きいんだよなー！俺、まだし
た事ないから、そんなデカいの入んねえよー！

「グルルラアツ!!」

コイツら団体がデカ過ぎて、同時に戦うのが二体つてのが救いだ
な。理性も無いみたいだし、バカ正直にぶん殴つてくるだけ。

だが拳圧だけでもかなり身体が持つてかかるから、少し大きめに避け
ないといけないから体力を削られる。服も削られる。それ見て
オークの本能が刺激されるのか、更に過激になる。

もう最悪。しかも理性は無いけど、こちらの攻撃も殴つて相殺して
くるから、中々ヒットしない。そもそも俺はこんな風に正面切つて戦
うようなタイプじゃない。忍びっぽく、不意打ちとか騙し討ちするタ
イプ。

てか、それが対魔『忍』として正しい姿と思うんだよな。なんで大
半が筋肉で占められているんですかね。・・・・・俺、筋肉じやな
いよな？

あ、なんか戦闘に参加してないオーケーがアヘってる男達を犯し始め
た。・・・手コキAとBにしよう。どちらも目を覚まして、自分の惨
状を目の当たりにすると自ら喜んで腰を降り始めた。

「・・・・・チャンスだな」シユコー

スルリとオーケー達の股下を液体も避けながら移動し、盛つてるオーケー二体の下へ。まずは目に突き刺してー、そこから水を溢れ出させ

てー・・・・はい、頭ボーンツと。
同様にもう一体もボーンツ。

「・・・・・よし」 シュコー

頭が吹き飛んだ死体にヘコヘコして手こきA Bをポイツ、ポイツとオークの群れの中へとぶん投げる。オーク達の中心に投げられた本人達はギラギラとしたオーケ達の視線と濡れ濡れの股間に目をキラキラと輝かせている。

少し観察してるとすぐに押つ始めた。^{おぱじ}しかし、輪に入り切らない数体のオーケが興奮し切った様子でこちらに来たのでこれをなんとか撃退。

後は目に刺して水をバーツとやつて、頭ボーンツ。序に元対魔忍達の首をスパーん。

「・・・乗り切れたぞー」 シュコー

喜びの声を上げたいけど、疲れたのでなんか棒読みになつた。あ、それよりもあのババアの方だ。多分、オーケ達が入つて來た所から逃げたよな？

・・・・・おお、隠し扉になつてゐる。先には廊下があつてー・・・・・うん、逃げられたな。まあ、アイツ程度の悪党は吐いて捨てる程に居るし、一人を始末しようがしまいが大して変わらん。

今回は名門の秋山家の凜子さんも証人として居るから、咎められる事は無いだろう。

「・・・・・あ、忘れてた」 シュコー

凜子さんと言えば、あれだ。無色無臭の薬を大量に吸つてアカン事になつてゐるんだつた。

「凛子さん、大丈夫…………じゃねえな」シユコー

「あつ、♡・・・おお、♡お、ほつ♡」

自ら対魔忍スーツのおまんことおっぱいの所を破つて、自慰に耽つていた。薬で辛いのは分かるし、もう限界だろうなー、とは思つたけど・・・すまない。ここ一応、敵地のど真ん中なんだ。

取り敢えず、撤退しましよう。仮拠点に取つておいたホテルが近くにありますから。

「イクツ♡・・・？秋う？・・・秋♡秋うー♡」

「はい、残像でーす」シユコー

性欲で我を忘れて襲い掛かつて来て、手が宙を切つた凛子さんの背後から脇差しの柄尻で首をトンッとやつてダウン。

受け止めるのを忘れたが、対魔忍だから大丈夫大丈夫。薬が付着してるかもしれないから、水遁で身体を洗い流しておんぶ。

「んつ♡・・・あつ♡」

ふおおおお!!お、おっぱいがむにゅう、つてなつた!俺、今上半身殆ど裸で凛子さんもおっぱい丸出しだから・・・うおおおお!!我慢しろ、俺!!ここで襲つても待つてるのは尿道姦だぞお!?
・・・・・よし、萎えた。



扉をなんとか攻撃しまくつて壊し、脱出に成功。なんであんなに頑丈なんだよ・・・。
道中は水遁で姿を消して、特に事件も無くホテルへと到着。強いて言えば、凛子さんが薬の影響で身体全体が敏感になつたからか、歩く

度に乳首やらおまんこが擦れて大変悩ましい声を上げていたくらいだ。

後、無意識なのか、ギュッと抱き締められたり、首元に顔を埋めら
れたり・・・・・全く、俺を誘惑するんじやありません！

「うるさい」

んつあつ秋にい秋に包まれてえ···おつほお、おお、お
しゆございいいい脳を犯されりゆううううう「シユコ一

軽くシャワーを浴びて戻つてみるとプレデターがオナつてた。あ、いや、アレ凜子さんだ。何やつてんだ、あの人。

「イグゥウ、ウウ、ウ♡♡おお、お、♡止まんにやいい、♡イグの止
まんにやによ、おお、♡♡癖になりゅ、うう、う♡♡」シユコ一

凄いな。もう数十秒はイキ続けてるぞ。・・・・・あ、一段落したのか、大の字になつた。きつと、あの兜の下には見事なアヘ顔を披露しているに違ひ無い。喘ぎ声だけでここまで明確にイメージさせるとは・・・流石、対魔忍。

「お、おおほへえ」「シユコ一

一
・
・
・
凜子さん

おお、起き上がつてピクリとも動かなくなつた。それにしてもこれからこの人がどう弁解するのか、ちよつと楽しみだな。少し意地悪してやろう。

「わ、私は『凛子さん』では無い！オナニー仮面だ！」シユコー
「…………は？」

・・・何言つてんだ、この人。幾ら何でも混乱し過ぎでしょ。後で絶対に死にたくなるぞ。まあ、面白そだから少し乗つてみるか。

「・・・・・それなら、凜子さんは何処へ？」

「『凜子』なら目の前に居るではないか」シユコ一
「・・・??」

どうしよう。会話の意味がまるで分からん。

「・・・それじゃ、貴女が凜子さんなんですね？」

「いや、私はオナニー仮面だ！」シユコ一

「・・・凜子さんは何処へ？」

「目の前に居る！」シユコ一

「・・・??」

無限ループって怖くね？

「えーと・・・すみません。一から説明してくれませんか？」

「ふむ、そうだな。・・・私は君の性欲が具現化した存在。日々持てる余している君の性欲が限界を迎える、代わりにこの女に乗つ取り、発散していくのだ」シユコ一

おう、誰が性欲魔人だ。失礼過ぎるだろこの人。

「・・・じゃあ、俺の所為で凜子さんは・・・ど、どうしたら凜子さんから出て行ってくれるんですか?!」

「え!?・・・えーと・・・・こ、この女のオナニーを手伝つたら、自然と私は消滅するだろう」シユコ一

おお、おお、まさか乗つてくるとは思わなかつたんだろうな。テンパつてるテンパつてる。

「お、オナニー……」

「あ、いや今のは冗談で……」シユコ一

「分かつた！それで凜子さんは助かるんですね?!」

「ええ？……あ、ごほん……うむ、そうだ」シユコ一

ヤベえ、この人めっちゃオモロい。

兜の下で凄い動搖してて凜子さんを想像しながらもこういうチームメンバーが発情した時用に用意しておいたオナ口をバックから取り出す。

見た目は完全にデイルド。しかし、尿道部分が開いており、そこに卵管を突き刺す事が出来る。

「それじゃ、立つて下さい」

「……え？」シユコ一

「立つて下さい」

「な、なんでだ？」シユコ一

「？……そちらの方が気持ちイイと授業で習いましたが？」

「そ、そんな事を習っているのか!?」シユコ一

普通はまだ習わないけどね。だって、俺の歳でこんな娼婦のような任務は出ないもん。……まあ、教師という立場を使ってそういうのを教えて来る人は居るけど……。

「俺だけ、特別授業を受けさせて貰いました」

「と、特別……既に毒牙に掛かって……おのれ、許せん」シユコ一

「その人によると立つた状態で頭の上で腕を組み、ガニ股でしつかり腰を落とした体勢で……このデイルドをヌコヌコすると気持ちいいんだとか」

「と、とんでもない変態だな……」シユコ一

「さあ、早くして下さい」

「…………え？」 シュコー

ん？何を呆けた顔をしてるんだ？まさか、もつと普通な感じで楽しむだけ楽しめるとか思つたんじゃないだろうな？

そんな事はさせん。今回は唯でさえ役に立つていなかつたんだから、少しくらいこつちのストレス発散に付き合つて貰うぞ。

「ま、待て……私はもつと普通で」 シュコー

「先程の乱れ方を見るに普通にしては到底終わりません。敬愛する先輩にそんな訳の分からぬ存在をいつまでも取り憑かせておく訳にもいきませんし。それに気持ち良くなりたいのでしよう？ならば、選り好みせずにまずは試してみるべきです」

「は、はいい……」 シュコー

戸惑いながらも頭の上で肘を持つように腕を組み、ゆっくりと腰を下ろす凜子さん。計らずとも原作を少し再現してしまったな。

・・・プレデーターの兜を被つてるから、かなり間抜けに見えるのが難点だな。

「もつと腰を下ろして下さい」

「ま、まだなのか!?」 シュコー

「……気持ち良くなりたいんでしょ？それともアレは俺を騙す為の方便なのですか？」

「い、いや!?そんな事は無いぞ！……う、うむ……これで……どうだ？」 シュコー

「内股になつていてます。これだと快楽が逃げてしまうらしいです」「う、うう……これでいいか?」 シュコー

首まで真つ赤にして……相当恥ずかしいんだろうけど、オーケー並に愛液が溢れ出てるんですが。……さてはこの人、真面目そうに見

えて相当な変態だな？

「はい、それではオナ口を挿入していきますね」

「ま、待て！まだ心の準備がツ···いひ、いい、い、
ええ、♡♡」シユコ一
♡♡一気に奥まで

「腰が逃げてます。しつかり落として」

「んほお、おお、おお♡♡しょ、しょれらめえ♡♡おまんこにダイレクトにくりゅうううう♡♡♡——シユコー

「要も足も子鹿みたハコガウガウにてまサ

けですよ？ 凜子さんつて、
くしゅり 感じ易い変態さんなんですね」
くしゅり しゃい

ちかうう 薬い 薬の所為にやによお らぬええ
ええ 気持う畏體ぞ二二かづくつうやうう

シユコリ

「いいんですよ、おかしくなつても。全部、受け止めてあげますから。盛大に無様に情けなくイキまくつてください・・・・ほら、こう

してオナ口をクルクル回転させると気持ちイイでしょ?』

「んにゃ、ああ、ああ、あ♡♡お、お、おお、おお、♡♡イギエウ、
ウウ、ウ♡・・・んほお、お、お、お、お、♡♡♡」シユコ一

ガニ股のまま爪先立ちになつて、仰け反りながら盛大に潮吹き、そしてオナ口の中に独特な白に近い透明でイクラみたいな卵がポンツと勢い良く十個程出て来た。

因みに凜子さんはベッドの上に居て、俺は床に居るので潮がめぐらしくかかる。またシャワーを浴び直すか。

「・・・お、
おお、
ツ、ツツ、
・・・イグ」シユコー

・・・兜、取つてあげるか」

盛大にイキ果てた後、そのままベッドに倒れて気絶した。兜を取ると白目となつて想像以上のアヘ顔を晒し、色々な穴から涙などに混ざつて媚薬だと思われる液体が排出されていた。

これなら、もう大丈夫だろう。

水遁で綺麗にしてやり、凛子さんの荷物も纏めて俺は浴室へと向かう。

この件をきっかけに凛子さんの性癖が歪んだ事に気付いたのはもう少し後のお話。

媚薬と惚れ薬は紙一重

五車学園は対魔忍を育成する学校であるが、何も戦闘訓練ばかりをやる訳では無い。普通の学校の様に主な使用用途がクイズ番組程度の一般教養も習つたりする。

だが座学は一部を除いて基本的に問題無いが、実技は割と対魔忍的な要素が取り入れられたりする。例えば、体育だと野山で足音を消しながら、先生相手に鬼ごっこしたり、目覚めた忍法を伸ばしたり。

で、今回やるのは家庭科、それも調理実習。個人的に嫌いな授業トップスリードを現在進行形で更新中だ。

別に料理が苦手な訳では無い。寧ろ、水城家の執事である『じいや』に男の嗜みとか言われてスバルタ氣味に叩き込まれたから、そんじよそこらの主夫よりは出来る。

何が問題かと言うと、使う材料が問題なのだ。

「はい、それでは皆さん。班に分かれましたね。手順は各々が事前に調べた通りに。何か不安な事があれば遠慮無く聞いて下さい」

家庭科の担当である（女目線だと工口いらし）三十代くらいの男の教師が合図を出し、それぞれが自身の役割を果たす為にわらわらと動き出した。

今日、俺達の班が作るのはクッキーだ。先程、先生が言つたように予算を渡されて、この日までにそれぞれが食材を購入して来た。縛りは予算以内である事と手頃なおやつて事くらい。

四人一組で組まされ、メンバーは俺と相変わらず壁を感じる『秋山

達郎』、達郎と同じく忍法が使えないふうまの現当主『ふうま小太郎』、それから前回のとある授業で仲良くなつた『上原鹿之助』の男子四人。

今回は内容が内容なだけに男女別で授業を受けている。女子達は外で先輩達と訓練中だ。何故なら、それは数多く並ぶ食材や食器の中で一際異彩を放つ手の平サイズのハートの小瓶に入ったピンク色の液体が原因だから。

どう見ても媚薬です。本当にありがとうございました。

「・・・本当にこれを入れるのか？」

「・・・そういう授業だから、やるしかないだろ」

「うう・・・」

瓶を手に取つて、左右に軽く振りながら愚痴の様に呟くと律儀にふうまが答え、上原は顔を赤くしてこっちを見ながらモジモジしてる。媚薬という物に対しての恥じらいと言うよりも、コレに対する恥ずかしい思い出が蘇つての反応だろう。そう、それは数日前の事だ。



媚薬、というものがどんな物かを実際に体験してみよう、というアホみたいな授業があつた。聞いてだけで出落ち感満載である。

内容は初手から見栄を張つて原液で飲んだ男性教師がヤバいと純粋に心配した生徒が呼んだ女子達を担当していた女性教師に連れて行かれ、結局その日はどちらも帰つて来なかつたという期待を裏切らないもの。

それでも後日、授業は再開されて俺達は水と媚薬を9：1で薄めた物を服用した。だがそれでも現役の対魔忍でも我を失うような物をそういう類の訓練を本格的に積んでいない者にとつては中々キツいようだ。

飲んだ奴らのほぼ全員は見事に発情し切つた。俺はと言うと、水遁で包んで体内に吸収されないようにしてたから問題無かつた。

実を言うと皆のこの反応は先生達の思惑通りで、授業の本来の目的はその時の対処法らしい。一人一個配られた新品のオナホ（前世と同じ）を片手に教卓の上で先生による実践演習。それを見ながら皆でオナニー大会。俺の目は死んだ。

特に薬の効果も出ていなければ、教卓の上ではいい歳した男がM字開脚でオナホ（細い管付き）片手に尿道ごとシコシコして野太い声で

喘ぎ、周囲は顔を赤らめた男共が慣れない手付きでオナホをシゴき、一部を除いて声変わり中のガラガラ声を押し殺したように喘ぐ。

どうやつて勃たせると?これで勃つたらソイツはホモだ。……この光景、この世界の女子からしたら暫くオカズには困らないような、そんなご褒美的な光景なんだろうなあ。

せめてこの教室から目を逸らそうと外を見れば、隣の席だった上原が目に入った。他と変わらずシコシコしていたが、何やら様子がおかしかつた。

発情してはいるし、手は忙しく動いているが……どうにも物足りなさそうと言うか、苦しそうだつた。暫く観察していると到頭^{とうとう}目に尻に涙が溜まり、押し殺すように嗚咽を洩らし始めたので見ていられなくなり声を掛けた。(周囲の奴らはシコシコするのに夢中で全く気付いていなかつた)

すると、どうやらどれだけシゴいても気持ち良くならないんだとか。それどころか、微妙な刺激ばかりで寧ろ苦しくなるばかりと言われた。

コイツ、見た目は華奢で女っぽいのに相当な淫乱なのか?と邪推したが・・・あ、いや、この世界だと女っぽいから淫乱なのか。

しかし、よくよく見てみれば、凄い粗チンだつた。具体的に言うとフル勃起して手の小指くらい。結構小さめの上原の手にすっぽりと収まつて見えなくなるくらいには小さかつた。

この世界では粗チンだからと言つて、特に気にされる事もある無い。大きいに越した事は無いし、強いて言えば、パートナーの卵管が入らない可能性があつたりするだけだが・・・まあ、そこは当人達でなんとかするだろ。

彼の話を聞いて成る程、と思つた。これだと殆どオナホに入つていいから気持ち良くならないんだな、と疑問が解けてスッキリしたので「そうか・・・頑張れ」とだけ言つて、見なかつた事にして机に伏せた。

被つてたひよつとこのお面がゴツゴツしてて、ちよつと寝難かつたがそれでも伏せ続ける。これ以上、関わると嫌な予感がするから。

少しして横から聞こえて来た、再びの嗚咽。無視したかったが考え直してみる。コイツはこのままで結局、イケないままだろう。

そういつた経験が無さそудаし、このまま野に放つと忽ち肉食獸に襲われ兼ねない。別に俺に被害は無いだろうが後味が悪過ぎる。それに仮に襲われなかつたとしても、このまま我慢し続ければ何れは精神が壊れる。

もう放置する方が面倒臭くなりそうな気がして来たので起き上がりつてオナホを取り上げた。

「あ・・・」

残念そうな声が聞こえたが、無視して手に手袋の様に温水を覆わせておちんちんをシゴく。

「あ、つゝやめつゝ・・・い、ひい、ひい」

オナホの時よりも数段気持ち良さそうな声を上げたと思うと、次の瞬間に背筋をピンッと伸ばして小刻みに痙攣した。

子種は出ないが、我慢汁の様な透明な液体がトロトロと出て来て、覆わせていた水ごと廊下の水道に投げ捨てる。

「・・・もう大丈夫か？」

「う、うん・・・・・・ありがと」

「気にすんな」

いそいそとチャックを閉める上原を尻目に、そう言えば姿を消す技術を應用すれば、逆の効果として本来とは異なつた姿を周囲に見せて、ついでに俺からは周りの景色も音も消せるんじやね?と思いつた。

早速やつてみると割とすんなり出来て、ついでに水遁で耳栓もした。・・・なんかミラー号っぽいな、と思つたのは内緒だ。

これでこの時間は平穏に過ごせるだろうと思つたが、ちよいよいと袖を引かれた。俺からは見えないが外からは俺が見えるので特に驚く事は無いがこちらからは相手の様子が見えない。

取り敢えず、耳栓と袖を引かれた方だけの水遁を解くと真っ赤な顔をした上原だつた。

「どう s . . .」

聞く前に気付いた。ズボンのチャック開けて勃起してたから。

「.」

「う、ごめん また その」

「分かつたから . . . もう何も言うな」

この後、五回くらい抜いた。媚薬、恐るべし。



そんな事があつて . . . なんか懐かれた。周りに見られたくないのと体勢がキツかったのもあつて、膝に乗せて抜いたのが悪かつたのだろうか？

でも仕方無いじやん。水遁解いたら解いたでコイツの喘ぎ声が五月蠅過ぎて周りの奴らも流石に気付くんだよ。そしたら羨ましそうな目でこつちを見て . . . 果てには先生にシゴいてくれないか？と頼まれる始末。

我慢しまくりながらも一回だけ頑張った俺を誰か褒めて欲しい。

同じく思い出していたのか、こちらをチラチラ見てくる上原から目を逸らすと、鋭い目付きでこちらを睨む達郎が。

「ズルは駄目だぞ」

「分かつてるつて。きちんと入れるよ」

「全く……」

姉に似たのか、それとも精神的には女寄りになつたのかは分からんがこの達郎はかなり眞面目だ。姉よりもガチガチに固まつた人生を送つてゐる。

いや、この場合は姉の方が少し緩いと言うべきだろうか？？？微々たる物だな。

因みに完全に余談だが達郎は普通に発情して自分でシコつてた。なーんか、手馴れてる様子だつたんだよなー。？？いや、何も考えて無いつすよ。

オカズは前にふうまから買い取つてたゆきかぜの隠し撮り写真だらうなー、とか考えて無いつす。眞面目な達郎君がそんな事をする訳無いじやないですか嫌だー。

あ、ふうまは普通に授業を休んだみたい。いつものサボリではなく、なんでも腹違ひの姉に物凄い剣幕で休むように言われたらしい。？？？大事にされてんなー。

？？？授業中、達郎も羨ましそうにこつちを見てたのはきっと媚薬の効果で頬が上気していた所為だと思いたい。



料理出来ない組が上原とふうままで、達郎は普通に料理が出来たので上原を俺が、ふうまを達郎がカバーする事になつた。

まあ、所詮はクッキーなので早々問題は起こらない。包丁使わないし、使つたとしても対魔忍だから刃物の心得は皆持つてゐる。？？？なのに、どうしてこうなつたのだろうか。

「あー……あー……」

「うわあ……」

「うう……」

目の前にあるのは見た目は普通だが、なんか怪しいオーラを幻視してしまうクツキー。

やつちまつたなあ、という風の俺。ドン引きのふうま。媚薬の恐ろしさを身を持つて知ったが故のトラウマで恐怖する上原。

勿論、オーラなんてものは出ていないのだが……製作工程でまさかの達郎がやらかしてくれたから、そう見えてしまう。

「ど、どうしたんだよ。上手に出来ただろ？」

「「……そっすね」」

張本人が全く気にしてない現状に俺達は何も言えなくなる。何をしてくれやがったのかと言えば、小瓶の中の媚薬を全部投入した。この場合の適量は数滴で充分だつたのに、だ。

多分、前回の普通の調理実習で食材を用意したのではなく、予め必要最低限準備されており、余す事無く使つたから……同じく、今回先生が用意した分は全て使うべきだと思つたのだろう。

料理は出来てもおかしな部分で真面目で頑固だから……ああ、もうう。

「どうすんだよ、コレ」

「どうするって言われても……捨てるしかなくね？」

「う、うん……その方が……良いと思う」

三人でコソコソと会議して、満場一致で捨てる事に。勿体無いし、評価は貰えなくなるが仕方無い。これは流石にヤバい。下手をすれば校長だつて簡単に墮ちる激物の可能性が大なのだから。

・・・あ、俺は普通に評価貰えるわ。何故つて？先生のオナニー手伝つたからですがナニか？

だが問題はこの馬鹿真面目な奴にどう伝えるか、だ。下手にこれは分量が間違えたから食べれない、とか言えば信じない達郎が試食する

だろう。

勉強出来る馬鹿だからな、コイツ。阿呆とも頭対魔忍とも言う。

「はい、では出来上がった班から包装袋を取りに来て下さい」

時間が来たのか、先生の声が室内に響いた。何故、ラッピングするのかと言えば、これを食べるのは俺達では無いから。

これらを吃るのは今、外で女子と一緒に訓練をしている先輩方であり、授業が終わるのを見越して届けに行く。無論、これも歴とした授業の一環だ。

自分達は薄めた媚薬に翻弄されたが彼女達は違う。誇り高い対魔忍にそんな物は通用しない、と俺達に教えて分かり易い目標としてもらう為なんだと。

はいはい、対魔忍（笑）対魔忍（笑）。意地張つて原液飲んで轟沈したお股対魔忍が何言つてんだか。

取りに行くのは達郎に任せて、俺達は再び話し合う。

「コレ、食べると絶対にアウトだよな」

「二応、生地の量が多いから一個分は幾らか薄まつてるとは思うが・・・」

「それでも前の時よりは・・・濃いと思う・・・」

「・・・仮に・・・仮にコレを先輩が食べたとして、我慢出来なかつたとする。・・・まず俺達では抵抗出来ないだろう。ナニがとは言わんが」

「「つ!?」

有り得ない訳では無い色々と端折つた仮定に二人が息を飲む。先程よりも明確な危機感を持つてくれたようで何より。

「そう言えば、水無瀬は誰に渡すか、もう決まつてているのか？」

「あー、確かに気になる。水無瀬君、凄い人気だから心做しかなんか先

輩達がソワソワしてたよ」

「んー・・・あ、そつか。先輩達は自分達の代でそのまた上が受け取つてゐる見た事があるから、知つてゐる人が多いのか。・・・だから、今朝から凛子さんにチラチラ見られてたのか」

「・・・ああ、達郎の姉さんの事か?」

「うえ!?あの斬鬼の対魔忍つて言われてる凄い人だよね!・・・ほえ、やつぱり水無瀬君つて凄いなあ」

何やら上原が尊敬の眼差しで見てくる。色々とツッコミたい所はあるが・・・『やつぱり』ってなんだ?お前、まさかとは思うが先日のオナニー大会で俺がそつち方面に凄い奴とか思つてないだろうな?違うぞ?あの時はお前が限界寸前でかなり敏感になつてただけで、俺のテクが超絶凄まじいとかじやないからな?

先生?・・・二度とソイツを示す名詞を使うな。今だつて、教卓に立つアイツを視界に入れただけで殺意の波動に目覚めそうなんだから。

「姉さんがどうしたんだ?」

「「「?」」

「!」」

バツと振り向けば、達郎がラッピング用の袋を手に怪訝な顔をして立つていた。話が逸れて何一つ解決策が立つていらない事実に気付き、焦りまくつていると何故かジロリとこちらを睨んで来た。

「・・・まさか、姉さんに手を出すつもりじゃないだろうな?」

いや、寧ろ手を出され掛けたんだが?

「そんな事はしないし、仮にそのような事態に陥つてもあの人なら自分で何とか出来るだろう。・・・それとも俺なんかに手も足も出ない程にお前の姉さんは弱つちいのか?」

「・・・ふんっ」

まあ、あの人なら何とか出来ると言つても誰も擊退する、なんて言つてないがな。下手すれば、返り討ち（意味深）にしそうだ。拗ねた様に袋をテーブルの上に置き始めた達郎に安堵しつつ、タイミングミットが刻々と近付いている事を思い出した。

先生に事情を話しても、あの教師は無駄にプライドが高いから、達郎と同じように試食して昨日の名譽挽回とかしだすだろう。そのまゝ、また連れて行かれて、ピュアな達郎は全く気が付かずに「やっぱり大丈夫じゃないか」と何故か、自信を付ける所まで容易に想像出来てしまう。

そもそもクッキーという簡単な物を作ったのがいけなかつた。達郎が料理初心者ならよかつたのだが・・・下手に実力がある分、この程度で失敗する筈が無いと思ひ込んでいた。事実、クッキーとしては完璧だから。

だが問題となつているのは料理の腕では無く、先日に自分達を苦しめた物だと、いい加減気付いて欲しい。

「・・・達郎、それを誰に渡すつもりなんだ？」

「・・・どうしてお前に言わないといけないんだ？」

「出来るだけ、渡す相手が被らない為にだ。貰えない人が要るとなんか気まずいだろ」

「・・・・ゆきかぜ」

「「「は?」」

真面目な達郎は一理あると思つたのか、ボソツと出した名前俺らは開いた口が塞がらない。聞き間違いかと思つて問い合わせたら、今度は少し怒り気味に答えた。

「ゆきかぜ、僕の彼女だよ。渡して悪いの？」

「いや、お前・・・先生には上級生達に渡せと言わされて・・・」

「アサギ校長に確認したら、ゆきかぜなら問題無いって言われた」

「何が？ 一体全体何を根拠にそんな事を断言したんだ、あの人？ 幾ら、名門の出で他よりも耐性があるとは言つても……あ、薄めたヤツだと思つて……あ、一（察し）

「だがアイツはまだそこまでの訓練をしていない。襲われる危険だつて……」

「ゆきかぜは他とは違う。この程度で我を忘れたりなんかしない」

「うわあ……ゆきかぜ、ドンマイ。お前が普段から俺に対してもスキンシップ多いから、相当耐性持つてると思われてるみたいだぞ。達郎の奴、ゆきかぜがお前に対しては自分からスキンシップした回数が極端に少ないのを気付いていいんだろうか？ 触れてる割合は男女にしてはかなり多いけど、全部お前から触りに行つてるだけだからな。

しかも、長時間の接触がある日の夜はアイツ、部屋で滅茶苦茶オナつてるからな？

「……そつか。なら、凜子さんに渡すのが問題無いか？」

「やつぱり姉さんを！」

「違うつて。一人一袋しかないんだから、お前がゆきかぜに渡すなら、弟に貰えなかつた凜子さんは悲しむと思うぞ？ 下手すると誰にも貰えなかつたり……」

「姉さんは僕に貰えなくとも沢山貰えるに決まつて……！」

「もしもの話だ。だから、そんなに大声を出すな」

「くつ……！」

相当迷つてるみたいだが、この調子だと天秤はゆきかぜに傾くだろう。もうご愁傷様としか言えない。まあ、将来的に他人に初めてを奪われるよりは今、襲つて襲われた方が互いにマシだろう。

◇

私は幼い頃から対魔忍として研磨を積み、今では斬鬼の対魔忍と称え、恐れられ、逸刀流の師範まで任せられるようになつた。

今まで幾つもの修羅場を潜つて來た。死を覚悟した事なんて数え切れないがそれでもどんなピンチも切り抜け、こうして生き伸びて來た。

秋山の名に恥じぬよう、対魔忍としての誇りを持ち、常に胸を張れるよう心掛けて來た。

そんな私が・・・・・人生最大のピンチに陥つていた。

「がつ・・・・・ぐう・・・・・うう・・・・・♡」

対魔忍スーツに大きな染みを作り出す程に溢れる愛液。全身を絶えず駆け巡る電流のような快楽。常にほんの少し動いただけでイツてしまい、真面に動く事すら叶わない。

今、私は自室のベッドの上でどうしようもなく・・・・・発情していた。

◇

事の発端は今日行われた下級生との合同演習。つまりは幼い頃から親しくしている達郎の同級生である、ゆきかぜ達との訓練だつた。

しかし、私達のクラスでは表向きは兎も角、女共全員が別の意味で待ち望んでいた日でもあり、かくいう私もその一人である。

それは後輩の男子達による手作りお菓子を渡される日なのだ。例えそれが媚薬入りだとしても、男子による手作りという甘美な響きの前ではそんな事はどうでもよくなる。

そもそも私達はそういう訓練を受けさせられていたし、事前に彼ら

が使う量を処方して耐性を付けていた。

そして今日、その日がやつて來た。人によつては一つも貰えなくな
る可能性があつたものの、私は初めからその心配は無かつた。

なんせ、私には可愛い可愛い弟が居る。ゆきかぜという彼女が居る
には居るが、今回は上級生へのプレゼントとなるからその選択肢は除
外されている。

まだゆきかぜと付き合う少し前までは、私の破れた対魔忍スースを
おかげにしてナニカと勤しむような男だ。そんなシスコンが私以外
に渡す筈がないと、そう思つていた。

笑顔で駆け寄る達郎が私の横を通り過ぎるまでは。

「あ、おーい！」

「む？ 達郎か？ ……どうし」

「ゆきかぜ、はいコレ」

「へ？ ……え、クツキー？ どうしたのこれ？」

「今日、家庭科室で作つてたんだ。本当は先輩に渡さないといけない
らしいんだけど、校長先生に許可を取つたから。…か、隠し味に…：
愛情を入れてみたんだ。口に合えば…いいけど…」

「ツ～～！ 達郎！！」

「ちよ、ゆきかぜ？ こんな所で… そんな… 大胆な…」

「…」

何だこれは。クソが。粗マンのヘタレビツチが。人様の弟に公衆
の面前でなに抱き着いてんだ。ぶつ殺すぞ。

ふん、まあいい。訓練終わり、つまりは汗だくで抱き着いたんだ。
これで少しくらい達郎も嫌な顔を… してないな。寧
ろ… なんか、真っ赤になつて… 発情しているような。

私はなんかもう色々と虚しくなつてきたのでラブコメを繰り広げ
ている二人から目を外す。決して、ゆきかぜが羨ましくて殺意の波動
に目覚めそだとか、そういう訳では無い。

ちつ、私達の頃は同級生の男子達が先輩にお菓子を上げる姿を指を咥えて見て居る事しか出来なかつたというのに・・・・ちつ、ラブコメの主人公かよ。ちつ、一人だけいい思いをしやがつて。ちつ。

はあ、と人知れず溜め息を吐く。それでもキヤツキヤウフフしている後ろの二人の声が聞こえるから、その場をさつさと去ろうとした時、視界の端に人影が写つた。

ソレはバッタのようなお面を身に付け、素顔を隠している。しかし、不審者などではなく、歴とした私の後輩でゆきかぜ同様、昔馴染みである『水無瀬 秋水』その人であった。

今でこそ、おかしな格好をしているものの昔は仮面などを付けておらず、その素顔を知る者は少なくなつたが噂通りの美男子であつた事は間違いない。

・・・・あまり思い出したくないが、というか殆ど覚えていないが先日の任務で物凄い醜態を晒してしまい、正直顔を合わせづらい人物でもある。

噂では彼もゆきかぜと何らかの卑猥な関係にあるのでは?とあるがそれは違う。自他共に認める女嫌いであるものの、単純に性に関する事を忌避しているだけであり、普通に接していれば普通に接し返してくれる。

・・・・でも、ゆきかぜだけ判定が緩い気がする・・・というか絶対そうだ。挨拶代わりに抱き着くとか羨ま・・・なんてハレンチな。

ああ、それと誤解のないように言つておくと達郎も健全な関係を築いているぞ。その辺は忍法も使つてしまふ監視しているので問題無い。

「・・・凜子さん」

「ん?・・・ああ、秋か。^{しゅう}ゆきかぜならあそこに居るぞ。二人だけの空間を作つてるから、少し空けてから渡すといい。それじゃ、私はこれで失礼する」

私は・・・媚薬が原因で先日の任務を失敗したから、貰えないだろうな。

どうせ彼も信頼しているゆきかぜに渡すのだろう。彼女なら不本意ながらもそれなりに媚薬への耐性があるし、彼と最も親しい女でもある。

私も他と比べれば、彼とは格段に親しいと胸を張つて言えるがゆきかぜが相手では分が悪過ぎる。なんだ同棲つて。なんだ義理の兄つて。羨まし過ぎるぞ、クソが。

こつちは血が繋がつてゐるから、達郎に全く手が出せないつてのにお前は選り取りみどりかよ。

はあ・・・虚しい。もう今日は授業も部活も無いから、さっさと帰ろ。

「・・・凜子さん、待つて下さい」

「！・・・ど、どうした？」

と思いながら、秋の横を通り過ぎると手を引かれた。・・・て、手：握つちやつた・・・わわ！や、柔らかい・・・凄い・・・いつの間にこんなに成長して・・・。

「・・・これ」

そうして差し出されたのは可愛らしくラッピングされたクツキー。その数三袋。・・・ん？三？

「え・・・わ、私にか」

「・・・はい」

恐る恐る受け取り、まじまじと見る。やや形が崩れているがある程度均等に作られた物、まるでお店にあるような綺麗な物、そして大き

さも形もバラバラな物の三人分。

恐らく、綺麗なのが秋のだろう。となると残る一つは……。

「他二つは……その、頼まれました」

「あ、ああ……そうか。良ければ礼を言つておいてくれないか?」

「はい……それでは俺はこれで」

「ああ……気を付けてな」

「はい……あ、食べるのは帰つてからにして下さい」

「?……承知した」

この時は意味が分からなかつた。きっと目の前で食べられるのが恥ずかしかつたのだろう、と一人勝手に結論付けて私は帰路に着いた。

早く秋の手作り（と顔も知らぬ男子）のお菓子が食べたくて、さつきまで笑い転げていた女共の舌打ちの音なんか気にせず、ルンルン気分だつた。ソレが劇薬であるとも知らずに。



で、この様である。

最初は味わつて食べようとしたが幼馴染みとは言え、美男子の手作りというだけで凄まじいまでの補正が掛かり、手が止まらなかつた。無論、補正無しでも美味しいが。

媚薬の効果が最初に少し出たのもいけなかつた。ほんの少し効果が出ただけでこの程度か、と甘く見てしまつたから。

全て食べ終え、少し発散しようとなんとかベッドの上まで来れたが媚薬の本領が發揮され、完全に動けなくなつてしまつた。

おかしい、話が違う。こんなの現役の対魔忍ですら耐えられるか怪しい猛毒だ。これと同じく物をゆきかぜが？…不味い、達郎がツ…！

そう思えどもすぐに強烈な快楽が思考を塗り潰す。もうイッてる

のかどうかすら分からない。耳を通り抜けていく自身のモノとは思えない獣のような嬌声、ガクガクと痙攣が止まぬ四肢、息が喉を通るだけで快感を感じ、呼吸すら眞面に行えない。

そんな時、ふとここに居る筈の無い人が明滅する視界に写り込んだ。それは先程と変わらぬ仮面を付けて、表情が全く分からぬがいつの間にか開いた窓枠にしゃがむ愛しい人だつた。

「ふえ・・・?しゅうう・・・?」

「うわっ・・・物凄い事に・・・・・・その・・・すみません」

・・・いや違う違う。ただの幼馴染みだ。今のは媚薬で少し・・・いや、かなり弱っていて・・・・・・そう!吊り橋効果つてヤツだ。

「やらあ・・・み、見ないでえ・・・・・・違うのお♡これはツ・・・媚薬の所為でえ・・・♡」

「分かつてますよ。だからこうして來たんです。・・・なので・・・あの、何かして欲しい事つてありますか?」

「して欲しい事お?・・・ギューッとしてえ♡」

「え・・・・・・あ、はい。・・・こ、こうですか?」

「んふふふ♡しゅう、だいしゅきい♡♡」

あつ♡ああ、♡イクツ♡イツてるう♡

へえあ!？そ、そんな強く抱き締められたら・・・い、ひい、いい、い、い、い♡♡しゅごいこれええ♡♡胸の奥までしゅうで満たされちゃつてるのおお♡♡

「あ、す、すみません、凛子さん・・・つい」

「名前・・・♡『さん』付けにやんてやらあ♡しゅう、呼び捨てにしてえ

♡♡「・・・凛子」

「ツ!?」

「・・・♡♡」

へえあ？なに・・・今の？名前呼ばれただけで・・・凄い快感が・・・。それに頭もなんか・・・フワフワして・・・胸がポワポワする・・・。

「もつと・・・♡もつと呼んでえ♡♡」

「凛子」

「んふうー♡み、耳元で囁くのらめえ、♡」

「なら、やめますか？」

「やー♡嘘なの♡もつと呼んで欲しい♡凛子をもつとダメダメにして欲しいのお♡♡」

どうやら私はこの甘美な時間から・・・暫く、抜け出せそうにはないようだ。



ゲロ甘な空間を作り出しているゆきかぜと達郎、それを見て死んだ魚のような目になっている凛子さんがその場を去ろうとしたので丁度いい、と駆け寄る。

なにやら勘違いをして受け取らずに帰ろうとしたが引き止めてなんとか受け取つて貰う事に成功した。

これで取り敢えず悩み事は無くなり、小太郎や上原に挨拶をして帰路に着こうとした。そしたら、家に帰つてみるとじいやに呼び止められた。

どうしたのだろうか？と思い、話を聞いてみるとなんかゆきかぜがヤバいらしい。

「・・・え、ゆきかぜ帰つてるの？」

「ええ、今は自室で安静にしております」

てつきり、達郎と熱い夜を過ごすものだとばかり思っていたから、

これには普通に驚いた。話を聞く限りでは達郎とは結局、何も無かつたらしい。

「・・・ふうん、意地でここまで帰つて来たんだ」

聞いた訳では無いがなんとなく分かる。

どうせ、媚薬の効果が出てない事を不審に思つた達郎が抱き着くなりして、ゆきかぜの情欲を煽る。それでもゆきかぜは達郎を襲わなかつたから、達郎は『やっぱりゆきかぜは他とは違う』とかそんな感じのおかしな自信を抱いて、ゆきかぜはもう色々と限界で早足で帰つて来たのだろう。

この媚薬自体、割と即効性はあるものの効き目の波が来るのが遅い。それは処方する量が多ければ多い程に遅く、後から大波がやつて来る。

ちょっと心配になつたので覗いてみれば、案の定だつた。いや、予想よりも凄い事になつてる。白目剥いて完全に気絶してるよ。

達郎を呼ぼうと思つた。ゆきかぜの相手をしろつて。男を見せろつて。でもやめた。それをしたら、これまでのゆきかぜの涙ぐましい努力が水の泡になつてしまふから。

で、どうしようか考えて、そう言えば机の引き出しの二重底にしている所にある小さな金庫にゆきかぜがいつも使つてるエログッズがあつた事を思い出した。

暗証番号？不知火さんの誕生日と失踪した日の二つだ。

そうして取り出したのは子供用の小さく細いオナロ。上原といい勝負をしている。因みに爺やお手製である。必要だから、と無理矢理渡された時のゆきかぜの顔が今でも忘れられない。

あんだけ嫌々言つてたのに期待した眼差しで手元のそれを見て、しかもそれにどハマリしてしまつた程にゆきかぜにとつては気持ちいいらしい。

本当は任務時に媚薬を摂取してしまつた時用なのだが・・・過保護

さが裏目に出たな、爺や。

水遁の術で胃の中にある媚薬を取り除こうと思つたが完全に体内に吸収されているのでそれも叶わない。だから、許せゆきかぜ。別に俺が直接手を出す訳では無いんだ。

そんな訳で意識が逝つてゆきかぜを更にイカせた。

もう凄まじい程の乱れっぷりだつた。気絶してゐるのに滅茶苦茶喘いで途中でじいやが心配して見に来た。生け捕りにした車海老のよう跳ねまくるから、爺やに抑えて貰つて、なんとか正面に呼吸ができるレベルまでは収まつた。

これ以上すると幾ら対魔忍と言えどもイキ過ぎて下手をすれば、脳みそが溶ける。耐性の無いゆきかぜなら尚のこと。

一段落着いて後は爺やに任せることにし、俺は部屋から出る。一息吐いてそこでふと、気が付いた。

(あ、凜子さん・・・)

全く同じ物をの人には三倍分渡してしまつた。今回はこちらが完全に悪く、あの人にはなんの落ち度も無いので流石に知らんぷりは出来そうにない。

と言うか、ゆきかぜの様になるだろうな、と思つたから、家に帰つてから食べるようになつたのだ。あの人なら色々と律儀だから、媚薬だと知つた上で完食してしまうだろう。

そんな訳で大急ぎで様子を見に来たら、案の定である。窓から見える部屋のベッドで対魔忍スーツのまま乱れ狂つていた。

しかし、流石と言うべきか。色々と一杯一杯ではあるものの、ゆきかぜのよう気絶はしておらず、確かに意識があるようだつた。

それでもかなり危ない状態である事に変わりは無い。鍵が閉めてあつた窓を水遁で水を隙間に通して鍵を開ける。

すると、漸くこちらに気付いたのか、虚ろな目の凜子さんがこちらに視線を向けた。

「ふえ・・・？しゅうう・・・？」

「うわつ・・・物凄い事に・・・その・・・すみません」

籠っていた雌の匂いが一気に押し寄せ、ちょっとクラツと来てしまった。こうして自分の仕出かした事を目の当たりにするとどうしても罪悪感が湧いてしまう。

だから、それを発散する為なら出来る限りの手助けをしようと思った。女性に対するのそういうお世話は前回のように特別授業を受けさせられて割と心得ている。本当、皮肉な事だけど・・・。

でも本番は駄目。幾らこの人でも少し心の整理とか・・・色々と・・・・と、兎に角、「なんでも」と申し出はしたが流石に少しひ制限を付けさせてもらう。

そう思い返して口に出そうとしたのだが・・・。

「して欲しい事お？・・・ギューッとしてえ♡」

「え・・・あ、はい。・・・こ、こうですか？」

「んふふふ♡しゅう、だいしゅきい♡♡」

え、可愛い・・・じゃなくて。

ギューッとする

←

抱き締める

←

抱く

←

セツクス

つて意味かと思ったけど、本当に抱き締めるだけだった。この密着状態を利用して押し倒されるかと思ったがそんな事は無く、只管に抱き着かれる。

こんな事でいいのなら、と思って強く抱き締めると加減を間違えて

しまつたらしく、一際大きく身体を痙攣させた。

どうやらイツたみたいだ……ああ、そうか。媚薬で敏感になり過ぎているから、過度な刺激は逆効果なのだろうか？

それにして新鮮だな。こんな凛子さんを見たのは初めてかもしない。前はこうなる前に自分でどうにかする余裕があつたから自分でオナつてたのか……。なんだろ……人肌が恋しいのかな？

「んふう♡・・・ん♡しゅう?・・・なんかおまんこに固いのが・・・」「あ、す、すみません」

ヤバいと思い、すぐに離れようとしたが互いに抱き締め合っていた、デバフ状態とは言え、これでも次期エース候補で純粹な実力的にも逸刀流の師範を任せられる程の力の持ち主。

何より、体勢的にもあちらが有利で駄目押しとばかりに脚を絡められていたので逃げる事は叶わない。まだに感じる溢れ出る愛汁が僅かにズボンの上から感じ取れた。

襲われる、と反射的に結論を出し、身体が恐怖で硬直する。無理矢理犯され、種を産み付けられ、気絶すら出来ない激痛に襲われながらの出産までの光景が瞬時に頭の中で再生された。

「ん・・・大、丈夫・・・だから・・・」

「!?

だけど、それは現実にはならなかつた。襲われる事は無く、さつきよりも強く包み込むように抱き締められた。必死に性欲を我慢し、こちらを安心させようと頑張っている事が容易に理解出来る程に苦しもうな声。

この人なら大丈夫だと、何故か先程までの恐怖は欠片も残つていなかつた。

「耐える・・・ふうー・・・耐えるからツ・・・ごめんね、怖

がらせて……はあーツ♡はあーツ♡……大丈夫ツ……だから……。
だから……泣かないで……？」

「え……」

言われて初めて氣が付いた。冷や汗とは別に頬を伝い落ちる雲に。
ソレは恐怖が限界を超えてしまったが故に出た物で……きっと今も
出ているのは安心したからだと思う。

「どうして……」

「分、かる……よ? だつて……んん♡……ずっと一緒にい……
♡居たから……ずつと……見てた……からあ♡……ふ一つ
♡ふ一つ♡……ごめんね……守れなくて……イ♡……
もつと……私が強かつたらツ♡……秋にい♡……こんな辛い思
いをさせずに……済んだのに……」

「頑張るからあ……耐えてみせるからあ……秋が……殻に閉
じ籠らなくて……いいようにい……せめて、私の前ではあ♡……
はあ♡はあ♡……安心出来るよう……」

媚薬の所為で甘い声になつていて。普段なら、キリツとした表情で
さぞかしカツコよく見えるのだろう。でも……それでも……。

「……ごめんなさい、凜子さん」

「もう……凜子つてえ……」

「……はい……そうでしたね、凜子」

「えへへ♡……イ、♡」

思い返してみれば、前回の任務で襲われそうになつたものの、あの
時ももしかしたら抱き着きたかつただけなのかもしれない。まあ、ど
ちらにせよあの時は敵地の真ん中だつたから、気絶か拘束くらいはし
ただろうけど。

それでも確かな事は……この人なら、もう大丈夫だという事だ。……いや、この人は大丈夫だつたんだ。それを俺が見て見ぬ振りをしていただけで。

「イギイイ、イ　いイ、♡♡　…　はあ♡はあ♡…　ああ、　あ、
ああ、　あ　ア、♡♡　…　はあーツ♡はあーツ♡…　ぐう♡」

「…　凛子」

「ふえ…　?どうし…　?」

凛子さんがイキまくつてる最中に身体を起こし、馬乗りの状態になる。準備をして、頃合いを見て名前を呼べば、さつきまであれだけ乱れていたのにこちらを見て呆然としていた。

「綺麗…」

「うう…　あんまり…　ジロジロ見ないで…」

「あ…　あ、え…　す、すまない…　つい」

仮面を取った顔…つまりは俺の素顔を見て、凛子さんは思わず、と言つた風に声が漏れていた。

こんなにも純粹な目で見られたのは初めて…　…と言うか、人に見せる事 자체が数年振りなので…　…中々に気恥しい。

「でも、どうして…」

「その…　…仮面よりかは…　…色々と捲るかと思つて…　…自分で言うのもなんですけど…」

序に着ていた対魔忍服を肌蹴させ、上半身だけだが下に着ていた対魔忍スーツのみになる。先程まで純粹だつた凛子さんの瞳が一瞬で情欲に染まつたのが分かる。

ゴクリと言ふ音もハツキリと聞こえたし、何よりも舐めますような視線が耐え切れず、両腕で身体を隠すように包んでしまう。

しかし、恥ずかしいだけで不思議と不快感は無かつた。

「ほ、本番は……駄目です……あの……オカズにする……とかなら……」

「い、いいのか?」

「は、はい……どうぞ……遠慮無く……」

返事は来なかつたが、代わりとでも言うかのようすに盛大にイッた。おまんこを触つていないので……恐らく、妄想だけでイッたのだろう。

媚薬の所為とは言え、とんでもない変態だなあ、と思うと同時に顔がニヤけて仕方無い。もつともっとイッて欲しくて、もつともつと感じて欲しくて……。

その日、俺は初めて水城家に帰らなかつた。

友達以上恋人未満

あれから数日が経つた。

俺と凜子さんの関係は前の通りだが、確かに何かが変わった。勿論、傍から見たら全く分からぬだろうが……。

「秋ー！ 凜子さんが呼んでるよー！」

「ん、今行く」

その最たる例がやはりこれだろうか。

「そ、その・・・だな・・・」

「分かつてますから、早く行きましょう」

ゆきかぜに知られ、教室の前で待っていた凜子さんの元へと行く。用件は言われずとも分かつてているので男女問わずに周囲の目を引く凜子さんの手を引っ張り、人混みを掻き分けて・・・・・おい、今シレツと尻を触ったの誰だ。

犯人は分からず・・・と言うか、こういう輩は後を絶たないので無視をして、早足に学校を出る。

「・・・・・」

二人の間に会話は無く、然れど手はしつかりと握り合い。他にも下校している生徒のヒソヒソと話す声だけが耳に聞こえる。

その話題を対魔忍としての聴力が勝手に拾い、互いに顔を合わせるが、恥ずかしくてすぐに逸らしてしまう。

「しゅ、秋・・・もう・・・」

「まだ駄目です。もう少しですから、我慢して下さい」

「あう・・・

最たる例がこうして共に登下校するようになつた・・・と言うのは僅かに語弊がある。傍から見たら、まるで恋人みたいな事をしているだろうが、別に付き合つてはいない。

確かにあの夜は乱れ・・・たのは凛子さんだけなのだが、淫らな行為に及んだ。然れど、どちらも好意を明確に示した訳でも無ければ、責任を取らなければならぬ様な事もしていない。

言わば、性欲に流されたが故の行為だ。元の世界ならまだしも、この世界でおまけに裏世界側であるならば、その様な事は日常茶飯事。だから、付き合つてはいないので。断じて。

そんな催促する彼女を無視して早足で歩き続け、漸く人気の無い森の中へと入る。念の為に更に木の幹の裏へと隠れてから仮面を外す。

「秋・・・早くう・・・♡」
「分かつてますから・・・ほら、スカートを上げて下さい」

「ん・・・♡」

木に背を預けた凛子さんの眼前で俺は膝を畳んで、必然的に上目遣いで命令する。下からなのに上から目線とはこれ如何に。

息が荒く、汗も多く出ていて明らかに正常な様子では無い凛子さんは俺の命令に一切の迷い無く従い、スカートの前の部分を両手で捲る。

果たして、そこにあつたのは可愛らしくもセクシーで大人な色っぽい下着・・・などではなく、真っ黒の頑丈そうな貞操帯だった。

「ほら、しつかりと足を広げて下さい」

「早くう♡早くしてえ♡♡」

「こら、ジツとしてなさい。鍵が開けられないでしよう?」「うう・・・だつてえ・・・♡」

名が示す通り、あれだけ凛として格好良かつた凛子さんが今では瞳に涙を浮かべ、ガニ股で無様に腰をヘコヘコ振つて知性の欠片も見当たらない無様な姿を晒している。

それでも愛おしいと思つてしまふのは……やはり、俺も結構どうかしているようだ。

懐から鍵を取り出し、凛子さんの動きと連動してズレる横の鍵穴へとなんとか差し込む。ガチャヤリと子氣味の良い音と共に貞操帯が緩み、パカッと肌を傷付けずに取り外してやる。

そうすると中で蒸れて溜まつた性臭がムワツと顔を覆い尽くした。

「スンスン……スーッ……ハーツ♡……ホント、酷い臭い。毛の処理も全くしてないし……幻滅しました」

「だ、だつてえ……秋が駄目つて言うから……」

「いえ、俺は『達郎にこんな物を付けているとバレてもいいなら、外して洗つていいですよ』と言つただけです。それに毛に関しては前からでしょ。言い掛かりはやめて下さい」

全く……それだと俺が凛子さんのおまんこのクツサイ臭いを嗅ぎたい変態みたいじやないか。まあ、臭いフェチとかじやないんでそんな事は有り得ないんだけど……。

「そんな事より、サッサとりますよ。結界は貼つてますがいつ誰が来るがなんて分かりませんし。……つて、グシヨグシヨじやないですか」

「言わないでえ……♡」

「……なに更に溢れ出してるんですか、この変態」

「ひう……♡」

俺に飲ませようと遠慮無く愛液を漏らしてる最低なおまんこに口

を付ける。舌を這わせ、噎せ返る程に蒸れた陰毛のジャングルから、秘境を見つけ出す。

・・・・・ん、愛液美味し♡

「・・・スウー・・・・・・・ふーつ♡ふーつ♡・・・んん♡」

「あつ♡・・・ひやツ♡にやか腔内あ・・・・・入つて來たあ・・・・・♡」

アツサリと侵入・・・と言うか、招かれた舌に細くも芯のある肉の棒がぷにぷにと当たる。これが卵管で普段は穴が隠れているがこうして興奮状態になると卵管の先が僅かに開く。勃起のように種を植え付ける準備みたいな状態だ。

そこを優しくチロチロと舐められると凜子さんは面白いくらい腰をガクガクさせる。

「あ♡ああ、ああ、あ、あ♡秋うう♡らめええ♡イクイクツ♡それらめええ♡♡」

丸一日我慢したのもあつてか、たつたこれだけで叫び声のような嬌声を上げ、口の中にドロリとした様なものが流れ込んで来る。よくよく舌先で感じてみれば、本当に僅かだがコロコロとした卵のような感触があり、これが赤ちゃんの素だ。

本来の男の射精と同じ感覚らしく、一度出すとかなり体力を持つて行かれるらしい。だからなのか、内股で両頬にムツチリと密着する太腿から力が抜け、グツと重さが増した。・・・凄いムチムチ♡

しかし、終わるつもりは無い。太腿の裏から回した両手で腰を掴み、頭と両腕で突然の快楽から逃げようとする腰をガツチリと掴んでホールドする。凜子さんが耐えれず、スカートを手放し、離れさせようと両手で頭を掴んで来る。

然れど、快樂で力が入らなければ、頭を撫でられてるみたいで心地いいだけだ。気分が良くなつて、今日は遂々サービスもしてしまつた。

「ほひゅつ!?……や、やめつゝそこはあゝダメだゝ秋うゝおかしくな
るからあ・・・やめ・・・ほおお、おゝおゝおゝ」

お尻に人差し指を一本突つ込み、そこから水遁で水を流す。所謂浣腸だ。無論、これだけで終わりではない。指を引き抜き、流し込んだ水を中で操つて出たり入つたりさせる。

凛子さんが大好きで擬似的なアナルアレイだ

「んつもつと・・・もつと出ひでえ。」

や やらあ ヒギイツ ヒギイツ と 止まんに やい イツでない よにい
い めめめめめめめめめめめめめめめめめめめめめめめめめめめめ
いい めめめめめめめめめめめめめめめめめめめめめめめめめめ
いい やらよおおお やらよおおお 「

「大丈夫、全部受け止めるから。射卵ひて、俺の為に取つておいた赤ちゃん、全部台無しにして。」

この世界には前立腺に似た器官が男女共にある。そこを突いてやれば、例えイツた直後であろうともピュッピュッと押す度に出て来る。

それは本人の意志とは関係無く、イッた感覺は無いが射卵（射精のこと）したが故に体力は消耗する。イッてないのに射卵後の脱力感と満足感を味わえるが同時に物足りなさを感じる。

しかし、連續で射卵して体力もドンドン削られ、結果として空っぽになり、イキたいのにイキたくない状況が生まれる。

「や、やめつ・・・ 無理ツ・・・ もう・・・ 出な・・・ ツツ・・・
・・・ あ・・・ もう・・・ ああツ」

「ん…………ふはあ♡見ひえ……♡沢山、出たねえ♡んぐ…………
んん、濃過ぎ♡お腹妊娠させられそ……おつと」

口一杯の卵子をゴツクンすると同時に凛子さんの身体がフラリと

倒れて来た。なんとか受け止め、横にすると完全に気を失っていた。
気持ち良くさせる為とは言え、流石にちょっとやり過ぎたと反省。



「あつ・・・んふつ・・・」

「・・・起きてます?」

「いや・・・ん今・・・起きた・・・」

「そうですか・・・」

「ど、どういう・・・状況、なんだ?」

「動かないで下さい。危ないですよ」

「い、いや・・・あの・・・」

「いや・・・ですか?」

「天国・・・あ、なんでもない。間違えた」

「ふふつ、いいですから、ジツとしてて下さい」

木陰の木の根元に背を預け、水遁で作った体温と同じくらいの耳搔き棒(水製)で耳搔きをしていると漸く目を覚ましてくれた。全く、耳まで開発したつもりは無いんだがなあ・・・。

「その・・・どうですか?」

「最高だ」

「あ、いえ・・・耳搔きではなく・・・その・・・お股の方・・・」

「え・・・あ、ああ・・・そつちか」

凜子さんがこうして貞操帯を付けるようになつたのは一重にあの夜以降、色々と我慢が効かなくなつてしまつたからだ。

激し過ぎる行為の末に物足りなくなつたのもあるかもしれない。今まで我慢して来たツケが全て回つて来たのもあるかも知れない。しかし、一番の明確な理由は大量の媚薬の摂取が原因だ。

慣れぬ者が規定を大幅に超える量を投与し、それら全てを身体が吸

収してしまった。幾ら対魔忍と言えども、身体の異物の分解が全く追付いておらず、こうした異常な性欲を生み出す。

本来であるならば、五車学園お抱えの医師に見てもらい、適切な抑制する為の薬を処方される。だが凛子さんはこれを断つた。

理由としては後輩の男子からのプレゼントでこんな無様を晒したくないとか、任務外でこのような失態は秋山の名に泥を塗るとか。

色々と表向きの理由を言っていたが恐らく、大きな理由は俺を守る為だろう。

今のは凛子さんの状態を腕利きの医者に見せれば、必ず眞面に動けなかつた程の重症であつたと氣付かれる。摂取量を誤魔化して報告した所でアツサリと見抜かれるし、なんなら凛子さんは次期エースでもある。

そんな人が使い物にならなくなるのは組織としても避けたい。故に片つ端から調べられる。そして疑問に思われるだろう。

『どうやつて発散したのか?』と。

そこで嘘を吐いた所で相手は対魔忍。同じ情報戦のエキスパート。簡単に俺が性処理をしている事がバレてしまう。

実際に彼女に聞いた訳では無いがこの人の考へている事くらい分かる。本来なら、只管に我慢する予定だつたようだが流石に発散が追い付かないだろうし、日常生活にも支障が出る。

だからこうして、実質的な加害者である俺が責任を取つてているのだ。

「その・・・本当に・・・すまない・・・私がもつと」

「その先は言わない約束でしょ?それに元はと言えば、俺が凛子さんにきちんと事情を説明しなかつたのが原因です。凛子さんは何も悪くありません」

「いや、例え知つても食べただろうな。なんせ、秋の手作りなのだから」

「・・・・うですか。・・・ほら、終わりましたよ。早く帰りますよ」

「……そう言えば、達郎とゆきかぜの方はどうなつたか分かるか？確かに、ゆきかぜも私と同じ物を食べたと聞いたが……」

「ああ……ゆきかぜなら、達郎と情熱的な夜を……」

「なんだと!?」

「……安心して下さい。過(ご)して貰う予定だつただけです。きちんと俺が相手をしましたし、達郎は何も知りませんよ」

「そ、そうか…………ん？」

「それにアソツ、今は薬も服用してます。万が一が起ころる事は暫く無いでしよう。……それより、いい加減弟離れするべきではありますか？忍法を使えないと言つても達郎も対魔忍ですし、もういい歳ですよ」

「え……あ…………ああ、分かつてる……分かつてる……」

「ならないんですけど……つて、長話が過ぎましたね。ほら、早く行きますよ」

話も区切りを付けて、俺が立ち上がる為に凛子さんに起き上がりつてもらう。しかし、今日の凛子さんは何処かおかしく、何故かうつ伏せになつて俺のお腹に抱き着いて來た。

「…………」

「あの……これでは立てないんですが……。と言うか、何してるんです？」

「……秋のお腹に抱き着いてる」

「やつている事ではなく、意味を教えて欲しいのですが……」

「…………」

「…………はあ」

どうやら、もう暫くはこのままの様だ。手持ち無沙汰になつたので、まるで駄々つ子のようになつた彼女の頭を撫でてやる。

ビクリと震えたがやられている事を理解したのか、次第に脱力していく。……で、暫くするとまた眠りに着いたのか、落ち着いた息

遣いが聞こえて来た。

「……少し意地悪が過ぎたかな」

手を止め、そつと彼女の耳元に顔を近付ける。そして、起こさない様に、耳を擦るかの如く優しく囁く。

「大丈夫ですよ。俺はもう貴女のモノです。絶対に離れたりしませんし、絶対に・・・・・離しませんからね？」

寝ている筈の凛子さんの耳が真っ赤なのは・・・きっと、沈み行く夕陽の所為だろう。

・・・・・・・・・起きてたのかよ。

工口本

工口本を見付けた。凛子さんの部屋で。

「・・・・・」

事の発端はいつもの如く凛子さんの性欲を氣絶するまで発散させ、部屋まで送つてベッドに寝かせた時だ。

そこでふと、部屋を見渡してどうにも散らかっている事に気が付いた。とは言え、物の数分で片付く程度だつたので軽く整理整頓をしていると本棚の奥に二重底ならぬ二重壁のような物を見付けた。

・・・で、好奇心に負けて覗いてみると案の定と言うか、工口本やその他諸々が入つていた。適当に手に取つた本の表紙は委員長っぽい女の人気が首輪を付け、美少年に分類されるであろうバニー服姿の男の子に土下座をしていると言う、かなりアレな物であつた。

題名は『我慢出来ずに襲つてしまつた近所の男の子に飼われる冷徹委員長』である。

「・・・・・」

無論、これだけでは無い。他にも『年下幼馴染みによる射卵管理日記』だつたり、『普段はクールな後輩が乱れる夜』などなど。漫画だつたり、仕舞いには動画だつたりともう両手では数え切れない程の工口系統の資料が出て来た。

・・・いや、まあ・・・うん。気持ちは分からなくも無いんだけどね。分からなくもないが・・・・・なんか無性にイラッとする。

確かに凛子さんがこうなつてしまつた原因は俺にある。それは承知の上であり、その罪滅ぼとして本番は無理でもある程度の願いは聞き入れてる。

しかし、だ。これだけのコレクションがあるという事は・・・つまり、俺では満足し切れなかつたという事が?ここまで身体を張つてい

るのに？

「…………不本意だけど……勉強するか」

ササッと幾つか拝借し、俺は秋山邸を後にする。

別にそういうつた行為にプライドを持つてゐる訳でも無ければ、それを傷付けられたとか断じて無い。他人にハンデを負わせてしまい、その責任を取る為に万全を期すだけだ。

それにコレは恩返しのような意味も含めているのだ。適当に行うのは、流石に人としてどうかと思う。

そう、人として当然の行いである。……うむ、だから俺は悪くない。悪いのはこんな見付け易い所に置いていた凜子さんだ。そうだ、凜子さんが悪いのだ。うむうむ、悪いのは凜子さんなのだ。

そう自己弁護を行い、早足で部屋に帰つた俺は……次の日、見事寝不足となつた。

◇

成績優秀、容姿端麗、おまけに名家出身で実力も申し分無い。そんな完璧超人である秋山家の長女『秋山凜子』は現在、非常に焦つていた。焦り過ぎて、表情筋が仕事しなくなるくらいにはマジで余裕が無かつた。

と言うのも、秋水との淫らな関係がかれこれ数週間続いたある日のこと。秋水が学校を休んだのだ。

ゆきかぜ曰く、かなり体調が悪いらしいが數日したら治るとの事が・・・ゆきかぜ自身内容は爺やから聞いたらしく、詳しい病状とは知らないらしい。

見舞いに行こうと思つたが、他ならぬ秋水自身が「誰にも逢いたくない」と拒否したらしいのでそれも叶わない。

そうして心配だけが募り、気付けば一週間の時が流れていた。秋水は今日も学校を休んだ。

「…………うつわ」

体調不良にしてはあまりにも深刻過ぎる。しかも、その間は面会謝絶。

体調不良が本当かどうかは置いといて、その一端を自身が担つていると思うと凜子の胸の内にどうしようも無い焦燥感が湧いて来る。

「…………無い、か」

普段は整頓している自室が、今は見る影も無く散らかっている。目的は無くし物の搜索であるが、結局それは見付からなかつた。

「腹を括るしか……」

彼女の搜索物、それは……エロ本であつた。

秋水が学校を休み、自身の内から滾る性欲をどうにか発散しようと久しぶりにコレクションを覗いて見た。最初は特に違和感を感じなかつたが物色していく内にそれに気が付く。

弟の達郎ですら知らない本棚の奥の収納スペースに仕舞つていたコレクションの内、幾つかが全く別の物に刷り変わつていて。物が物なだけに凜子は大いに焦つた。そして、部屋中を探し回り、途中でエロ本を全て読破して、漸く現実を受け入れた。
ああ……終わつた、と。

仕立て人の特定は容易だつた。

何せ、家に呼ぶ程に親しい友人なんて数えるくらいしか居ないからだ。皆、何處か一步引いた感じで接して来て、彼女自身それが楽なのでいいのだが……。

そうして記憶を遡り、一番可能性の高い人物が秋水だつた。

自惚れでなければ、秋と私はそれなりに……その、想い合つてい

ると・・・思う・・・。明確に恋人同士とか、そんなんじやないが。いや、でも私が秋の膝で微睡んでいた時にあんな事を言いながら、あんな事をされたのでもう実質恋人でいいんじゃないだろうか？・・・怖くて、告白なんて出来ないが。そんな、私の事を大好きな秋が私の自室で、如何にも自身を投影したようなエロ本を見付けたら・・・・。

完璧超人であろうとも思春期の女子高校生である事に変わりは無い。拗らせに拗らせた脳内では割と現実味を帯びたモノと所詮は妄想でしかないモノがごちゃ混ぜになり、大変愉快なストーリーが繰り広げられていた。

現実逃避とも言う。

「はあ、やばい・・・」

最初は嫉妬なんて思い上がっていたが、流石に洒落にならない事に気が付いた彼女は思いの外溜まっていたが故にノーハンドで抜いた後な事も相俟つて気分が急降下していく。

ああ見えて、結構打たれ弱い所のある秋だ。私でさえ、秋が他の女の事を考えているだけでどうしようも無い怒りと悲しみが湧いて来るのだ。それが性的な対象であつてみる。もう泣くぞ。

ゆきかぜが何故か自分にだけ、念を押して『来るな』と言われた事が余計に現実味を帯びさせて来る。

それがゆきかぜの意思ではなく、秋水から伝言を貰った爺やに念を押すように言われたらしいので、今までの夢のような関係との落差に「やらかした」と後悔の念が募つていく。

相手が昔馴染みで大切な近所の年下美男子であれば、尚のこと。

そういう訳で達郎にもゆきかぜにも黙つて、秋水が住んでいる水城邸へと赴いた。

因みに達郎達は遊びに行く、という名のゆきかぜとのデート中であり、本来なら二人つきりにさせないよう邪魔を・・・・じやなく

て、淫らな行為に及ばないように監視しに行くのだが、この日は涙を呑んで断念した。

「はい、どちら様でしようか？」

「あ・・・秋山凜子です」

大きな館のインターほんを押して暫く。扉越しに・・・いや、自身を囲むかのように全方位から寒気がするような悍おぞましい声が聞こえて来る。

生者でない特有の薄気味悪さに常人であれば震え上がるであろうその声は、幼い頃から慣れ親しんだ凜子にとつて聞き慣れたもの。しかし、今回は後ろめたさから、どうにも緊張で力んでしまう。

「凜子様でしたが。失礼ですがお嬢様に・・・」

「はい、それを承知の上で勝手ながら、訪問させていただきました。どうか、秋と会わせてくれないでしようか?」

扉が一人出に開き、中から骨の執事が現れる。骨なので表情は変わらないがどうにも怪訝そうな様子から、凜子の返答を聞いて申し訳無さそうに骨の中の炎が揺らめく。

「申し訳ありません。他ならぬ、秋水様のお申し付け故に、それは聞き入れ兼ねます」

「そ、そこをなんとか・・・」

分かり切っていた回答に凜子は食い下がる。だがそれでも首を縦に振らない執事に、自身が想定した以上に秋水は怒っているのではないか、と徐々に恐怖が湧き始める。

「ど、どうか!一目だけでもいいのでつ・・・!」

「再三申し上げます。駄目なものは駄目です」

意志を曲げる気は無いのか、聞き分けの無い子供を諭す様に執事の語調がやや強くなる。

元々、怒らせる気は無かつた凜子はそれで勢いが弱まり、今日は諦めようと意識が傾いて来た。そんな時、屋敷の奥から人の気配がした。

見なくとも分かる。一週間ぶりの秋水だつた。

「……爺や、どうかしたの？」

「しゅ、秋水様!? お部屋からお呼び頂ければ、行きましたのに」

「水を頼んで待つても来なかつたから、こうして居るんだけど……。

それより、誰か來たの?」

「あつ・・・えつと・・・」

現状が中々にマズイ状況だと認識した執事が玄関の外に居る凜子をチラチラと見て、どう誤魔化そうかと考える。

自身の存在がやはり都合の悪いモノだと感じた凜子だつたが、それよりも久しぶりの秋水との再会にテンションが上がつていた。

結果、あれだけ会うな、と釘を刺されていた凜子はやや身を乗り出して自身の存在を秋水に教えた。

「秋! わ、私だ! ひ、久しぶりだな。調子は・・・

「は? なんでその人が居るの?」

「その人・・・その人・・・・・・その人・・・・・・。

一週間ぶりの邂逅に、凜子自身浮かれていたのか、どうにもテンションが爆上がりしていた。だが、直後の冷た過ぎる声色と自分を呼んだ呼称に凜子の動作は完全に停止する。

そんな時が止まつた彼女の瞳に映し出されていたモノは、階段から見下ろす、心底不機嫌そうな顔をした想い人だつた。

「え、えっと……それが……どうしても、と……」

「……早く帰つて」

「しゅ、秋！ま、待つてくれ！あれは誤解なんだ!!と、取り敢えず、話を……！」

「……ちつ」

大体の事情を把握したのか、もう用は無い、と踵を返す秋水に我に返つた凜子は慌てて呼び止める。……だが、その返答は館内にやらと響く舌打ちだった。

それを聞いただけで、凜子の勢いは瞬く間に喪失する。

伸ばした手は力無く宙を彷徨い、表情からは感情が何処までも抜け落ち……。

まるで、何処かの誰かが大切な幼馴染みを寝取られた時の様に、その顔からは絶望が伝わって来た。

◇

「……うつ」

ビクンつゝと震える身体。

カーテンを締め切つた自室のベッドで凜子はオナニーに耽つていた。

「…………うつ」

再び、身体が震える。

しかし、その身体に快楽はあらず、ただ手に持つた写真を凝視していた。

「…………」

瞬きすらせらず、空いた片手は貞操帯が外れたおまんこに、帰り際に貞操帯の鍵と共に爺やから渡された秋水のちんぽを模したデイルドをずっと同じテンポで出し挿入れしていた。

「…………うつ」

薄暗くなつていく部屋の中で、涙混じりの情けない声だけが虚しく響いた。



「…………何だよ」

「今すぐ姉さんに謝れ」

「…………なんかあつたのか？」

病み上がりに学校に姿を出した瞬間、達郎に凄い形相でそう言われた。

「何も知らないとは言わせないぞ！姉さんが……忠告を無視してゆきかぜの家に行つて以来、一度も部屋から出て来ないんだ！」

「…………は？」

マジか、来ちゃつたのか……。あ、うん。そう言えば、来てた……
ような……。

うーん、と……ダメだ。記憶が曖昧で殆ど覚えていない。

「…………分かつた。取り敢えず、今日お前の家に寄るぞ」

てな訳で、秋山邸にやつて來た訳ですが。

早速、凜子さんの部屋の前に立つた俺を変わらぬ様子で睨み付ける達郎に、少し居心地の悪さを覚えてしまう。

「変な事をするなよ」

「はあ、相変わらず信用が無いな。昔はあんだけヒヨコみたいだつたのに」

「だ、誰がヒヨコだ！ 大体、元はと言えばお前がツ・・・！」

横でギヤーギヤー喧しいのはホツといて、鍵が掛かっている部屋の扉に手を当て、深海魚からヒントを得た索敵方法で様子を探る。

部屋はまた散らかっている。しかも、当たり散らしたかの如く、家具が一部破壊されている。

凜子さんは普通に居るみたいでベッドの上で横になつている。瞼は開いているから、起きてはいるけど・・・これは・・・。

手を離し、ドアノブに手を掛けるとガチャリ、と鍵が聞く。そして、達郎に釘を刺してさつさと中へと入る。

「・・・あの人は俺がなんとかするから、お前はゆきかぜとデートでもして来な。ここからはお前にはまだ早い」

「へ？ な、何を・・・あ、おい！」

また子供扱いを、なんて断末魔のように聞こえるが無視をして鍵を閉める。

部屋は暗く、輪郭がボンヤリと見える程度。おまけに、呼吸をする度に卵が腐ったような酷い悪臭がする。間違いない、卵子の臭いだ。

「・・・ツ♡♡」

血が燃え滾るのをなんとか抑えて、この酷い悪臭に漸く少し慣れた頃には視界も慣れて来た。

俺の存在に気付いていないのか、ベッドの上で寝そべる凛子さんは無心で何かを見つめ、デイルドをヌコヌコしていた。

未だに俺に気付かない事や、先程から何度も絶頂しているのだろうがその手を止める気配が無い事から、相当ヤバい事が窺える。本当、何があつたんだ？

「……凛子さん」

「…………うつ」

ふむ、反応無し。

仕方無く、スルスルと服を脱ぎながら、凛子さんの元へと歩み寄る。

「……っ!? シュ、秋うむう……!?」

「んつ、はむつ、ちゅ」

取り敢えず、俺の存在を知らせる為に馬乗りになり、口の中へと舌を捩じ込む。

俺の股の下で更にデイルドの出し挿入れが激しくなった、節操の無い凛子さんの手を重ねる様に持ち、優しく引き抜く。長時間挿入していたのか、相当粘り気が凄くかなり卑猥な音を立ててソレが抜ける。そして、デイルドの形にぐつぱり開いた割れ目に手を被せ、疲労が激しいであろうおまんこを水遁で治療と保護を同時に使う。

「秋う……」

「目を見ろ」

接吻は凛子さんが窒息しそうになるまで行い、両手で顔を固定して数センチの距離で目を合わせる。

その間、凛子さんは俺の頭から生える角、ピツチリ対魔忍スースの

背から生える翼と尻尾に気付く事無く、妖しく光る瞳に吸い寄せられる様に動かなくなる。

「・・・・・」

「・・・ふう」

暫くすると、度重なる自慰でただでさえ、力が入つていなかつた身体から、完全に力が抜ける。

その目に生氣は・・・元から無かつたか。

「幾つか質問するから、正確に答えて」

「・・・・・・はい」

抑揚無く答えが返される。

良かつた。目の輪郭が俺の瞳と同じく妖しく光つてるので、しつかりと催眠に掛かつたみたいだ。

「こうなつて、何日が経つた?」

「・・・三日」

「食事、水分補給は?」

「・・・行つてない」

その答えを聞き、水遁で水分補給も行わせる。対魔忍と言えど、流石にこれは身体に相当の負荷が掛かっているだろうから。

「・・・ゆきかぜの家に行つて、何があつた?」

「・・・・・・・・

その問い合わせに対する解答が返つて来ない。催眠が切れたか、と慌てたがどうやら違うらしい。

俺の催眠程度では抑え切れない程の感情が凛子さんの中で渦巻い

ていた。

「……秋に……嫌われた……」

「……は？俺に？」

そうして語られた、家^{うち}での一件。

それを聞き、どうしてこうも間が悪いのか、と頭を抱えてしまった。

「……嫌だ……嫌……だ……。嫌われたく……ない……。
嫌だ……よお……。」

本来、そんな事は有り得ないが……催眠を解いてしまう程に泣きじゃくるその姿にどれだけ強い想いがあるのか、嫌でも伝わって来る。

同時に凜子さんの部屋での自身の軽率な行動でこんなにも追い詰めてしまっていた事に罪悪感が湧き上がった。

それにあの期間は24時間毎日襲つて来る腹痛や吐き気、頭痛、それに睡眠不足も重なり、相当なストレスが溜まっていた。本来なら、もう少し軽めである程度慣れてはいたのだが……。

凜子さんとの関係が始まって、自慰の回数が毎日三回から五回まで増えた。

それに何の関わりがあるのか、と言うとそれだけ男の中にあるキンタマこつちの世界だとこれが子宮と呼ばれているに精子が吐き出される訳で。

それを排出する日が重くなるのは当然の事だった。

そんな訳でその日が来るとストレスで凄く性格が悪くなると言うか、隙あらば周囲に当たり散らしてしまうので基本的に誰とも、特に凜子さんは逢いたくなかったのだ。

少なからず、こうなつてしま^傷う事は予想出来たから。

よく見ると、部屋の壊れた部分の大半はあのエロ本が収容されていました二重壁の所だった。先程、外で何かを燃やした跡があつたので……

つまりはそういう事だろう。

別にエロ本とか、AVで怒つたりはしないのだがな。イラ付きはあるけど。

「嫌いになりますんよ。だから、もう泣き止んで下さい」

俺の催眠はかなりの制約があるから、こうなつたら大して効果は期待出来ない。

なので、俺からしたら何がいいのか全く分からないうが、胸板に凜子さんの頭を抱き込むように抱え、ギュッと埋めさせた。

そして優しく頭を撫でてやれば、弱々しきだがギュッと抱き着いてきた。

取り敢えず、効果はありそつたので満足するまで好きなだけ甘えさせてあげようか。



この世界でも変わらず、女性の胸が膨らんでいる理由。それは前世と同じく、赤子に乳を与える為だ。

前世通りなら、赤子を産んだ男の役目である筈のその仕事は残念ながら、生殖率を取つた代償に出産後の男の死亡率が極端に増加した為、女の仕事となつた。

無論、中には生き残る男も居るのでそれなりに乳を出す事は可能なのだが、殆どが機能低下しており、女性と比べるとその量は雀の涙程度女性程、膨らむ事も無い。

「はむう・・・ちうちう◦」
「んつ◦・・・ふう◦」

そう、本来なら赤子に対してのみ機能する筈のその行為。どうして、それを年上のスタイル抜群の美女にしなければならないのか。俺

は甚だ疑問だつた。

「・・・んつ♡んぬ♡パパあ♡♡」

「か、完全に寝惚けてる。どんな夢を見てんだか・・・」

そろそろ眠つたか、と。ずっと覆い被さる体勢がキツかつたので人間の姿に戻つて凛子さんの横に寝転がり、体を休めていたのだが‥。なんか、今度は急に覆い被さられて、ピツチリスース越しの乳首をまるで赤子の様に一生懸命吸い出した。

確かに俺はもう出るのだが、だからと言つてそんなガツツク程だろうか。

これでしつかり眠つてるのだから、なんと言うか。大したモノだ‥。

「んむう♡ちゅるるる♡レロレロ♡」

「くつ♡・・・うう♡・・・ひうつ♡♡」

しかも、凛子さんの今の格好は全裸。つまり、この薄い布切れしか、俺達を隔てる物は無く。

そんな中で甘える様にその我儘ボディを押し付けられると‥。うう、本当に眠つてるんだよな?

「ジユルルルルウ!!♡ちううう♡んう♪ぱあ♡れろお♡♡」

「つ、く、♡ツツ、くつ、・、ふう♡♡」

・・・白状するとこうなつて、もう三十分以上経つので‥。その、何度もイッているのだ。

しかも、この身体は数回胸でイッただけで収まる程、甘くはない。凛子さんが眠つてゐるであろう事を願うのは、先程から勃起してビクンビクン♡と情けなく痙攣してゐる敏感ちんぽが凛子さんの身体にしつかりと密着して、その存在を主張してゐるからだ。

程良く鍛えられ、それでいて包み込む様な柔らかさのお腹に押し付けられるこの現状は。ハツキリ言つて、隠しようが無い程にバレバレな状態なのだ。

「ふうーっ・・・♡ふーっ・・・♡あ、ちょ、馬鹿つ♡」
「・・・〜つ♡んうく♡♡」

グショグショに濡らしたおまんこをヘコヘコと擦り付けて来るものだから、脚を閉じていたのだが・・・。

一瞬の隙を突かれて、股の間に入り込まれてしまつた。しかも、イツた反動でこちらが背を仰け反らせていたのをいい事に、そこに手を滑り込ませてガツチリと抱き締められた。
もう逃げ場が・・・♡

「ジユルルツ♡ジユゾゾゾゾ♡んちゅ♡れろれろお♡はむう・・・
♡」

「はあ、あつ♡あ、・・・や、やめつ・・・ふうつつ、〜〜〜・・・ん
、ん、つ♡♡」

ああ・・・ダメだな。

イキ過ぎたのと慣れない魔の力で、もう押し退ける事すら出来ない。

寧ろ、魔の力の副作用で声を抑える氣力も、尿道姦への恐怖も消えて行く。残るのはただ、目の前の発情したメスの子を孕みたいという卑しい淫売精神のみ。

対魔忍スーツにクツキリ浮かんだ俺のちんぽに、孕ませたいと直接おまんこを擦り付けられる。

俺の身体も、もう言う事を聞かず開脚させられた脚が凛子さんの身体をロックした。絶対に逃がさないとばかりに、それはもうガツシリと。

もう逃げるのは止めよう。凛子さんだつて、絶対に起きてる。・：

と言うか、これで寝てるとか無理があり過ぎるだろ。

いつかは、と思っていたが。案外、早かつたな。

この人も相当我慢していたろうし……もう、楽になつていいいだろ

その夜、調教されておまんこを自ら求めるような、唾棄すべき存在だと見下していた奴らと同じように。

俺は、数えるのも億劫な程に喘ぎ、イカされまくつた。

□

「……んう？……秋う？……へ？なんで……え？どうい
う……」

「え、え？ 秋？ なんで怒つて……。え、秋どうしてそんなエツチな格好を……」

「アンタがこんなにしたんだろうが〜〜!!」

裸……気が付けば、朝で……。これって……も、もしかして……何も起きない筈が……」

「もしか」しねえよ!! 何も起き無かつたわ!! 何も無かつたんだよ! ホント、信つじらんないつつ!! マジで寝てやがったよ!! ・・・・・・・

「え、ちよ、秋！ま、待つて！嫌だ！嫌いにならないで!!」「知るか！一生、一人寂しくオナツてる!!」

その後、仮面越しにでも分かる程に怒気を放つ美男子と、それを才口オロと珍しく狼狽しながらも謝り倒して追い掛ける斬鬼の対魔忍の目撃情報が多発した。

「むう、姉さんがあんなに謝つてるのにい・・・秋の奴！」

「いや、あれもう放つといていいんじゃない？今日は見るからに凜子さんの方が悪いみたいだし……そ、それより達郎？その……

今日の放課後にまた二人つきりで街に出掛けたりとか……」

「え、どうして？姉さんも元気になつたし、秋と引き剥がす為に誘つて行こうよ？」

「へ？……え、あ……えーっ……とお……そ、そうねえ……

あ、あはは

死んだ目でまだ許さないでくれ、と仮面の美男子に懇願する雷撃の対魔忍も目撃されたとか……されないとか。

試験勉強

凜子さんと仲直りしてから、それなりの月日が経つた。その間、任務があつたり、修行したり、凜子さんの性欲を発散させたりと割と忙しい日々を過ごした。

そんな忍としての日々を過ごす中で俺は未だに童貞である。凜子さんの胸を揉みしだき、蒸れ蒸れのおまんこをイかせまくり、発情し切つた凜子さんと床を共にしたにも関わらず、童貞であり続ける。我ながらビックリである。

これは思い出したくも無いがあの夜、凜子さんから一晩中あの悩ましい程の無自覚エロボディで擦り寄られ、俺の子宮が子を産みたいと一夜とは言え、完堕ちしたにも関わらず、寝ながらずううううつと素股しかしながらド変態への意趣返しでもある。

度々セツクスしたい、と目で強く訴えられるが知った事では無い。あの夜の事を土下座して、俺を孕ませたいと嘆願するまではお預けだ。それまで俺の性技の練習相手に甘んじてもらおう。

閑話休題。

対魔忍と言えども普通に学校に通つて義務教育を受けているので、普通に筆記の定期試験が存在する。忍らしい試験もあるにはあるが、日々訓練を欠かしていないので中学程度であれば、問題視する必要はない。

どうせ術の上達具合とか、ちよつとした戦闘試験とかだろうしね。・・・そういう意味では達郎とふうまはヤバいな。アイツら、未だに忍法に目覚めてないらしいし。

ふうまは兎も角、達郎は勉強出来る分、無条件に赤点付けられるのはなあ・・・ちよつと可哀想だ。と、重度のブラコンである凜子さんにそんな事を零せば・・・。

「いや・・・総合評価だから、戦闘試験で好成績を出せば問題無いぞ」などと返された。

確かに姉が大好きでいつも姉の訓練に混じつて汗を流している達郎なら、余裕そうではある。…………まあ、つまりは完全後方担当、またの名を頭脳派と自称するふうまの赤点が決まった瞬間でもある。ドンマイ。

かく言う俺は実技は問題無いとは言え、筆記の方はやはり準備が必要だ。勿論、赤点ギリギリという程頭が悪い訳では無いが……今まできちんと勉強して10位以内をキープしていたので中学最後の夏休み前の試験もスッキリ終わらせたい。

同時に高校も定期試験の時期があるので、丁度良いという事で今はこうして凜子さんの部屋で向かい合つて勉強中である。因みに達郎は隣の部屋でアホのゆきかぜに勉強を教えている真っ最中だ。

今頃、勉強のし過ぎと達郎の無防備な部屋着姿を前にして、色んな意味で湯気を出している頃だろう。これは今回も断トツで赤点だろうな、あの筋筋は。

「…………」

「…………な、なあ、分からぬ所とか……あるか？」

「いえ、今の所は……」

「そ、そ、う、か。……あ、喉とか……乾いて……」

「大丈夫ですよ。これでも水遁使いなので体内の水分調整くらいは呼吸と同じように行えます」

「そ、そ、う、か。……うん……」

まあ、それはそれとして。凜子さんのソワソワ具合がヤバい。明らかに何かを期待しているようで、どうにも勉強に手が着いていない。

一体、なんの需要があるのか。先程から頻りに消しごムを落とすフリして、短パンから覗く俺の毛一つ無い生脚を見て来る。手を伸ばせばいいのに、態々身体ごと机の下に潜るんだから……思わず、吹き出しそうになってしまった。

別に凜子さんに教えてもらわなくとも分かるし、凜子さんも普通に上位の成績なので勉強自体は問題無い。こうして集まつたのもこの

勉強をする空気を作る為であつて、なんなら図書室とかでも良かつた。

だが図書室だと他の生徒も居るので良くも悪くも俺達は目立つてしまふ。それに慣れたとは言え、勉強中に仮面はかなり邪魔だ。

そこで、丁度ゆきかぜ達が秋山宅で勉強するというのでそれに乗つかる形で俺も来たのだ。案の定、達郎にめっちゃ詰め寄られたが……

凜子さんの説得でそこはなんとか許可が降りた。

……今考えてみれば、あれだけ渋る達郎をあんなに一生懸命説き伏せていたのは下心100パーセントか。道理で物凄い熱意に溢れていた訳だ。

しかし、目の前でゴソゴソされては流石に鬱陶しいので少し黙らせてみるか、と軽い気持ちで普通に分かる問題を尋ねてみた。軽く前屈みになり、態と少し服の中を見せる体勢となつて。

効果は絶大で、一つとして会話が無かつたからか嬉々として教え始めたが……服の中に気付くと途端に教えるのが雑になつた。ブラ越しでも分かるくらいに乳首を勃起させ、鼻息が荒くなり、身の危険を感じた俺は聞くのを切り上げて再び勉強に戻つた。

幸い、襲われる事も、凜子さんが理性を失う事も無かつたが……代わりに数分毎に分からない所があるかを聞いて来るようになつた。どう考へても下心丸出しである。試しにもう一度質問して、今度は前屈みにならず、ノートだけを差し出せば案の定ショボンとした。可愛い。

「…………」

「…………ん…………んう…………」

「…………あの」

「!? な、なんだ? 分からない所が……」

「いえ、そうではなくてですね……」

欲求不満なのだろうか。今にも自慰を始めそうな凜子さんを見て、

そう思う。

顔は火照り、息を荒らげ、乳首もビンビン。見えはしないがきつとお股なんて大洪水だろう。そんな状態で初心な達郎ならまだしも、俺を誤魔化せると思っているのだろうか。

だが分かつたからと言つて、面と向かつて「発情しないで下さい」なんて言える筈も無いし、言つた所で治まるとも思えない。

とは言え、凜子さんのノートを見るにマジで全然進んでおらず、このままでは集まつて勉強している意味が無い。その原因が曲がりなりにも俺にあつて、それで成績を落とされては後味が悪いし、何よりも達郎に何を言われるか分かつたものでない。

・・・・・

まあ、少しくらいなら・・・。

「・・・・・・・・・・・・いい・・・・です、よ・・・・」

「・・・・・・ん?・・・え、何か言つたか?」

「だ、だから・・・その・・・。我慢、出来ないなら・・・少しくらい、発散しても・・・」

「・・・・・・・・・・」

な、何か言つてくれないだろうか。黙られると流石に恥ずかし過ぎるんだが・・・。

どんな反応をしているのか見ようにも、想像以上に恥ずかしくて顔が上げられない。あまりの羞恥で今すぐにでも発言を撤回したいが・・・・・まるで照れ隠しのように俺の口は止まりそうにない。

「その・・・勉強、したいので・・・手伝えませんけど・・・・・み、見抜き・・・とか、なら・・・・・別に・・・」

「・・・・・い、いい・・・のか・・・?」

「俺の所為で・・・成績落ちた、とか・・・言われたく、ないので・・・」

「そ、そんな事は無い!」

うわっ、ビックリした。

突然、声を張り上げた凜子さんに驚いて顔を上げると、身を乗り出した彼女と至近距離で目が合い、息が止まる。咄嗟に飛び退く事も、押し退ける事も、顔を逸らす事すらも出来ず、互いに無言となる。

「…………」

いつまでそうして居ただろうか。整った顔立ちに染み一つ無い綺麗な肌、凜子さんが扱う空虚に関係無く、なんでも見通してしまえるような澄み切つた瞳。

それが美しいからか、はたまた單なる性欲故か。一瞬足りとも目が離せなくて、長い時を掛けてゆっくりと互いに近付いていく。

「ん・・・・♡」
「んう・・・・♡」

触れ合うような浅いキス。まるで恋人のよう、性欲ではなく愛情から来るその行為は不思議と気持ち良くて、愛されているんだと実感出来て、どうしようもない幸福感に満たされる。

いつまでも見ていたい凜子さんの顔を惜しみながらも、もつと感じたいからと瞼が自然と閉じる。

口に触れる柔らかな感触と僅かなリップ音。それらが、自分が今何をしているのかハッキリと突き付けられてるみたいで、もう後戻りは出来ないと心が理解する。

本当に今更なんだけど、あの夜の時は性欲に流されたから、で心の言い訳は着く。でも……これは性欲だけじゃない。自らの意思で、理性で持つて受け入れた。

俺はこの人を思つた以上に愛していたのだろう。こうして、軽くキスされただけで孕みたいと子宮が訴え、ちんぽがガチガチに勃起し、我慢汁が尿道をトロトロに解すくらい俺は凜子さんを……。

「……んつ♡……ちゅ♡……あ」

突如、一生懸命味わっていた唇の感触が消えた。目を開き、思わず物足りなさそうな声が出るが、それを無視して凜子さんは立ち上がると俺の背後に回る。

「……あ♡……んん♡」

「んつ……すうー……♡はあ♪……♡」

後ろから挟む様に足を回され、引っ付く程に密着されて抱き締められる。あまりの包容感に身体からふにやふにやと力が抜け、凜子さんの心地好い胸に背中を預ける。

何かを確かめるように上半身まさげを弄られ、凜子さん同様ビンビンになつた乳首を探り当てられる。鞠やかな指先が嬉しそうに乳首の周りをクルクルと焦らすように擦り、こちらの感度を煽る。

「んつ……♡……つ♡……つ……つつ♡やあ……♡」

「……♡」

思わず出た声に口を押さえたが、それはダメとばかりに穏やかに下ろされる。たつたそれだけの事なのに、俺の体は抵抗らしい抵抗をしない。ただただされるがままに弄ばれる。

恥ずかしい筈なのに、貴女で感じているのだと。そう伝わって欲しくて、声を出すのを抑えられない。

「あ……♡あつ♡……ひう♡」

「……♡……♡」

指先をほんの少し動かすだけで嬌声が漏れ出る。そんな状態まで調理されてしまつた俺に満足したのか、凜子さんは攻めるのを一旦やめて、俺の首元に手を向ける。

「あ
・
・
・
心」

一
九
〇
〇
〇
〇

上からボタンをゆつくりと掛け外され、徐々に胸元が晒される。興奮で身体が熱を持ち、匂いが濃くなつた右の首元に鼻を擦り付けられ、まるで犯すように匂いを堪能される。

羞恥で顔が赤くなるものの夢中になつてぐれてると思うとやはり抵抗する気力が失せる。それどころか、もつと嗅ぎ易いように首を左へ傾けてしまう。

「あつ・・・♡い・・・やあ・・・♡それ、ダメつ・・・♡
「すう・・・♡ふああ・・・♡んふふつ♡」

いつの間にか、ボタンが残り一つまで脱がされ、肩から服を下ろされる。あの夜以来、凜子さんのお気に入りとなつた、上半身を剥いで服を腰まで肌蹴させる格好で、丸裸にされた乳首を両手で直接虐められる。

別に弄つた事なんて無いけど、この世界では男女共に乳首も性感帯なので今でもイッてしまいそうになる。しかし、乳首だけでイクのは普通に恥ずかしいので我慢していたが・・・・・首元から感じる熱烈な視線について顔を向けてしまった。

あつさりと唇を奪われ、舌を捩じ込まれる。勿論、抵抗なんて今の俺に出来る筈も無く、寧ろ受け入れ、口内を蹂躪する舌に自ら舌を絡ませる。

「ん・・・♡ちゅ・・・♡れろお・・・♡」

「はむ・・・♡んちゅ・・・♡」

漏れ出る音が少ないのは隙間無く密着しているから。その中では激しいまでに絡み合い、溶け合い・・・そして、思わずイッてしまつた。

「あ、つ・・・♡・・・くくくつ、♡」

ちんぽの奥がきゅう♡と締め付けるような圧迫感。痙攣してしまふ程の快楽が全身に行き渡る。ビクビクと震える身体、それが凜子さんと完全密着していれば、気付かれ無い筈も無く・・・・・眼前でキスをしたまま、ニヤニヤと厭らしい笑みを浮かべている。

「んう？ふう・・・もしかして、イッたのか・・・？」

デ、デリカシーの無い質問を・・・。

少しイラついて、答える事無く顔を背ける。それが気に食わなかつたのか、凜子さんの愛撫していただけの指に、イッた直後の乳首を摘まれた。

「ひぐうううつ、♡」

「なあ、イッたのか？どうなんだ？」

まるで物分りの悪い子を諭すように優しい声で、それに反して指は強く摘み、引っ張られる。普段から剣術の修練をしている凜子さんのピンチ力は痛い筈なのに、俺の身体はいくのが止まらない。

俺つて、別に被虐願望とか無かつた筈なんだけどなあ。

「黙つてないでお前の口から聞かせてくれ♡乳首を弄られて・・・どうなつてしまつたんだ？ん？」

「イ、……♡イツ、……たあ、……♡イキ、、ましたあ、……
ひうつ、♡乳首、だけでつ♡イツてる……かりやあ、……♡」

「ふつ、ふふふ♡そうかそうか♡乳首だけでイツたのかしゅう、秋はエツチ
な子だなあ……かぶ♡」

「はう、つう!♡」

あ、ダメ……♡首筋、噛まれて……力が……♡

ただでさえ骨抜きにされてたのにこれ以上ふにやふにやにトロけさせられてしまつては、責めて隣に聞こえないようにと落としていた声量を抑え切れなくなつてしまふ。

それでも俺は……これ以上の快楽は、本当に隣に聞こえてしまう程の甘つたるい声が出てしまふと確信出来るのに両手が乳首を弄るのを止めて、腰に伸びるのを期待せずに居られない。

「こつちもこんなに大きくて……熱くて、エツチな汁がダクダク垂れて……♡ふふつ、そんなに期待しているのか?♡」

「ほお、……♡」

付けられた歯型から僅かに滲み出た血をチロリと舐め取られながら、ちんぽが両手に包まれる。ズボンはいつの間にか膝まで脱がされ……いや、よく見れば、自分から腰を浮かせていた。

温かくて、柔らかくて、スベスベなそれは……下手なオナホよりも気持ち良くて、凜子さんの耳元で下品な嬌声が思わず出てしまう。

「えつろ……こんなに物欲しそうに尿道をくぱくぱして……本當は秋も期待していたんじやないのか?擦る度におツユが一杯溢れ出て来るぞ♡」

亀頭をクリクリ弄られ、我慢汁でコーティングされたちんぽをシゴキ倒され、何度も何度も甘イキをさせられて……完全にいつもと攻守が逆転していた。

それでも湧いて来るのは悔しいとか、屈辱的だとか、そう言う感情ではなく、もつとシテ欲しいという被虐願望のみ。罵倒されるのを期待して、自ら足を開く。

・・・シテ♡もつと・・・好きに、して・・・♡」

「姉さん、お菓子を持つて来たから休憩でも

「どういたしまして！」

「 ? 」

まだ恋人ですらない・・・それも中学生相手に、現代社会的には余りにも最低なその告白に胸と子宮がキュンキュンして止まない。

謝るまで本番は許さないとか心に決めていたが、そんな事がどうでも良くなるくらい俺にとつては情熱的で、カツコよく写った。

「うんつ♡するう・・・♡孕ましぇてえ・・・♡俺の童貞ちんぽ、一杯

狼して
心

一達良！

一達郎？なんか物音したけど、どうし・・・・た、達郎！？なんで
気絶して・・・うわっひやあ!!秋！アンタなんて格好してんのよ!!

凛子しやあんんちゅ

「え？ え？ え？ え？ え？ なに、どういう状況？」

えへへ～♡凜子しやあん♡もつとお～♡

「……ちよ、秋やめなさい！凜子さんも！呆けてないで秋を抑えるの手伝つて!!うわっ!?達郎、泡吹いてる!?」

「え・・・・・あ、ああ・・・」

「凜子さん！凜子さん！？・・・あ、ダメだ。なんかトリップしてる

「んへへへ♡服脱がしゆねえへ・・・んしょ♡んしょ♡」

「うわわわっ!?秋、やめなさいたら！・・・・・ん？尻尾？」

「ふにゃあああ　つ　ああ!?♡尻尾らめええええ　♡　♡」

「え・・・・・・あ、気絶した・・・・・・・・・・え？」

勘違い

目が覚めたら自室のベッドで、何があつたのか思い出せない……なんて都合良いいかないんだなあ、これが。

「うぐおおお　おお…………お、俺は何を…………」

夢ならば、どれだけ良かつただろうか。

ちんぽに残る柔らかな手の感触、何度もイかされ、感度を上げられた乳首、性欲に呑まれて淫魔化した代償に襲う倦怠感がその可能性を否定する。

達郎や凜子さんは分からぬが……目が覚めてゆきかぜと顔を合わせた時のあの反応。頬を染めて目を逸らすとか、バツチリ覚えられてるじゃないか。

恥ずかしいと言うものもあるが、それ以上に少し厄介な事になつた。なんせ、ゆきかぜは……俺が淫魔とのハーフだと知らないからだ。

「…………説明、しないとなあ……」

実を言うとこうして水城家に居候し、対魔忍をしているとは言え、俺が魔の者である淫魔と人間のハーフだと知る者は意外と少ない。知つているのは爺やと現在、行方不明中のゆきかぜの母、それから俺の出自を知つてるアサギ校長…………くらいか？

凜子さんは……どうなんだろ。前に見せた事があつたけど、意識が朧気だつたし、覚えてないかもしね。その後も触れられる事は無かつたし……となると凜子さん……それから、達郎にも説明しないとだな。

正直な所、俺も親とは会つた事が無いので俺自身の事は人伝に聞いた程度の知識しか無い。なぜなら、父は俺を産んですぐに死んだから

だ。

出産に耐え切れなかつた、と周囲は言うが・・・恐らくそれは嘘だろう。

なんせ、相手は淫魔だ。精氣を吸い取る為には苦痛よりも快楽を与えた方が効率が良いし、簡単に死なれては面倒にも程がある。

魔の者、特に淫魔はそういつた技術に長けているのだから、子供一人産むくらい尿道をガバガバに調教する事なんて朝飯前だろう。

つまり、俺の産みの親は・・・・任務に失敗し、淫魔に孕ませれ、魔の血を引く俺を産んだという事実に耐え切れず、自ら命を絶つたのだと思う。俺の両親は表向き、任務で死んだと捏造しているのがいい証拠だ。

ハーフってのは基本的に迫害され易いからな。

「・・・・まあ、別にどうでもいいけど」

そう、どうでもいい。

頼んですらいなのに産むだけ産んで、自分勝手に死んだ顔も知らぬ他人だ。そんな女々しい野郎の事なんかどうでもいいんだ。

問題は、今の俺の身体にある。

ハツキリ言つて、さつきからムラムラが止まらない。凜子さんの黄金比のような身体の感触が今でも全身に鮮明に残つてるから、というのもあるが・・・・何よりも淫魔の特性がヤバいのだ。

「うう・・・♡」

俺が頑なに淫魔の姿を嫌う理由、それは性欲にある。

淫魔にとつて、精氣を吸い取るのは人間で言う所の食事のようなものであり、つまりは人間で言う所の空腹が淫魔にとつての性欲に当たる。

きちんと吸い取つていれば、適度な性欲しか湧かないが・・・逆に吸い取つていなければ、性欲が時間の経過と共に増していく。

勿論、その原因は精氣の不足なのだから、自慰で治まるようなものでは無い。幸い、ハーフの俺は人間の姿であれば、淫魔の衝動に駆られる事は無いが今まで全く使つていなかつたが故に淫魔化の制御が殆ど出来ないので。

平時であれば、人間の姿を保とうと意識すれば基本的に問題無いが…性欲を過度に我慢したりすると途端に淫魔の本能が疼き出し、本能が理性を凌駕してしまう。

今まで幼い頃に力に目覚めた時以来、淫魔化そのものを一度もしていなかつたので割と抑えが効いていたのだが…仕方無かつたとは言え、凜子さんが病んだ時に淫魔化してからは、今までの分が一気に溢れ出すように抑えが効かなくなつた。

セツクスをせず、ただイかせるだけの関係に不満を持つていたのは何も凜子さんだけでは無いのだ。下手をすれば、このまま我慢し続けていると性欲に支配され、手当り次第に食い散らかす性欲魔人になり兼ねない。

正直、その…性欲抜きにして、凜子さんの事はそれなりに…：好きだから…うん。裏切りたく、無いんだよなあ…。
だから、精氣を吸い取るなら凜子さんとがいいし、凜子さん以外は嫌だ。本人も性欲に流されたとは言え、子作りしよつて言つてくれたし、もうこれ頼んだら普通に行けるのでは…？

「いや、でも…流石に…ぬおおおお つ…」

でも、今はもう冷静になつてるかもだし。そんな状態の凜子さんに発情した俺が子作りしましようつて態々頼みに行くのも…なんか、違うじゃん？

それに俺、まだ中学生だし。どれだけ配慮しても絶対暴走する自信があるのに、セツクスなんてしたら確実に妊娠してしまう。

産める身体とは言え、まだ子供。出来れば、成熟してから産みたい…。

「・・・じゃなくて！」

違う。子供じゃなくて精気だ。なに、子供を産む前提で考へてゐるんだ俺は。大体、避妊なら水遁で子宮をコーティングするなり、洗うなりすれば問題無い。

そもそも淫魔は卵子からも精気を吸い取るから、自身が望まない限り、妊娠する心配は無いんだ。

だから、今考へるべき事は妊娠どうこうではなく、どうやつて凜子さんと性行為をするか、またはそこまで至るかだ。

恐らく、凜子さん自身に頼む事は差程難しい事では無い。いや、俺の精神衛生上かなりの大問題だがそこは取り敢えず置いておく。

問題・・・というか、最大の壁は達郎だ。今まで達郎は俺の淫魔の姿を知らなくとも、凜子さんと二人きりになる事をあまり良く思つていなかつたのだ。

そういう知識はあつても、自身の姉は他とは違つて淑女であり、純潔で氣高い存在だと崇拜すらしている。本当はただの処女を拗らせたドスケベ対魔忍なのだが。

そんな風に慕つていると凜子さん自身も知つてゐるからこそ、あの人は何かと弟の前だと格好を付けたがる。

だから・・・うん。場合によつては、俺が凜子さんに冷たくあしらわれる可能性があるという訳だ。当人の本音は別として。

そして、そのような裏事情を知つていたとしても、俺はショックを受けて二度と誘う事は無くなり、仮に凜子さんから誘つて来ても何か裏があるのでと勘織るようになるだろう。

前まではゆきかぜを盾にして、割となんとかなつていたが・・・俺が本人の意志を無視して性行為に及ぶ事が出来る淫魔だと達郎が知れば、何がなんでも阻止して来るだろう。
それに十中八九、事情を知つてゐるゆきかぜは俺が凜子さんと何をしようとしているのか勘付く。

だからと言つて、邪魔をして來るとは思えないが・・・・ほほ家族同然の異性に、今からセックスするので二人きりにして下さいと

言える程、開き直れてもいい。

どうしたものか、と布団に包まつて悩んでいると部屋の扉がノックされる。誰かと気配を探れば、爺やだった。

「どうかしたの？」

『秋山のご令嬢様が居らしていります』

「…………凜子さんが？」

『どうやらお見舞いの様ですが……お通ししますか？』

「…………達郎は？」

『いえ、お一人の様です』

…………ほーん？

「準備するから、合図したら通して」

『かしこまりました』

扉の外から気配が遠ざかつて行くのを感じてベッドから出る。

部屋に飾つてある花瓶の水を窓から巻いて、水遁で作つた水を入れる。序に花の方にも細工をして、元あつた場所に飾り直す。

いつ使うのか、要らないと言つてているのに爺やが頑なに置きたがつた食器類一式が入つた棚から、ティーカップを取り出す。

何事も準備しておくものだな、と爺やの頑固さに感謝しつつ紅茶を入れる。

テーブルに並べた湯気を立てる紅茶、その内の一つに掌に浮かべた飴玉程のサイズの水を混入させる。無色透明なので、俺が何かしたとは少なくとも視覚的には分からない。

「…………あ」

いつの間にか、出てしまつていた翼と尻尾を仕舞いつつ、クロ一

ゼットを開ける。そこは普段使うクローゼットとは別の場所であり、所謂勝負下着やら服が入っている場所で……透け透けのパンツやハイレグ、バニーボーイ等を見付けてソッと閉める。

これも爺やが用意した物だが、流石にハードルが高かつた……ので、履いていた下着を隅の方に脱ぎ捨て、適当にダボツとした服を着て、尾骶骨辺りに穴が空いたユルユルのショートパンツを履く。

一度、部屋を見渡し、窓から入り込む風に目を閉ざす。花瓶から感じる無味無臭の芳香に口端を歪め、ベルを鳴らして爺やに合図を送る。

落ち着いてテーブルの椅子に座り、細工をしていない方の紅茶を少しづつ傾け、凜子さんが来るのを待つ。

喉を通う暖かな液体に少し冷静になつて、自分は何をしようとしているのかと我に返り、羞恥心が湧き上がるが……もう一口飲むと頭に熱が上る。

自覚している分、まだマシだと思うが……本当にヤバい。これから起ころう必然に、ズボン越しの勃起が治まらない。テーブルの下とは言え、バレたりしないだろうか。

そんな期待を込めて脚を広げようとして……ノックの音に我に返る。

『私だ。……入つても……いいだろうか』

「どうぞ」

考えてみれば、凜子さんを部屋に入れるのは初めてかもしない。小学校低学年頃からの付き合いだつたが遊ぶ時は基本的に外か、秋山邸、水城邸のリビングだつたからな。

声に硬さを感じるから、緊張しているのだろう。斯く言う俺も、途端に緊張しだしたのだが……そんなのお構い無しにドアは開いた。

「つ!?……そ、その……見舞いに来た、のだが……大丈夫、

か？」

「つ……え、ええ……お陰様で。…………あの、お茶を用意したので座つては？」

「そ、そうする」

凜子さんは俺の部屋着を見てか、俺は凜子さんの私服姿を見て、互いに息を呑む。

半袖のシャツに前を開いたパーカーが巨乳の所為で脇に寄せられ、七分丈のズボンから綺麗な足首が覗く。ポニーテールの下に覗く首元は、暑かつたのだろうか、少し汗ばむ様子が非常に艶かしい。

今の俺にとつて猛毒にも程があるが、気合いで抑え込む。出会って即襲い掛かるとか、もうそれレイプじやんか。

大丈夫、細工はきちんと施した。落ち着いて、焦らず誘導すればいい。

「…………」

「…………な、何から話したものか。誘導せずとも手持ち無沙汰からか、勝手に紅茶を飲んでくれるのは有難いが……効果が出るまで少し時間が掛かるしな。

ただ黙つてたら、何をせずとも発情してしまうだろうから、俺が盛つた事は簡単にバレてしまう。なんとか、自然な流れでそういう空気を作らねば。

「…………?…………つ!?…………??…………」

!!』

なんか急に百面相しだしたんだけど……え、なに? 何かを見付けたみたいだけど…………あ、下着放つたらかしだ。

…………いや、確かに狙つていなかつたと言えば嘘になるがこ

うも効果観面とは。思つた以上にチョロいぞ、これ。

「……えつと……気になり、ますよね？」

「えあ！……あ、ああ……まあ……一応」

ちらちらと視線が部屋の隅に行くが、今そつちの話では無い事くらい理解してるよね？きっと理解していると信じよう。

煮え切らないのは多分、触れていい問題なのか迷っているからだろう。本当、変な所でお人好しなんだから。

「取り敢えず、何から……そうですね。まず、改めて見せましょ
うか」

「み、見せる!!な、ななな何をだ!?!」

顔真っ赤にして滅茶苦茶慌てふためいているけど、変な意味じやないからね？一体、何を想像してんだか……。

椅子から離れて、上の服を脱ぎ始める。服で視界が塞がるが、声だけ凜子さんの様子が分かる程に彼女は挙動不審となつた。

「へはあ！ほ、ほほ本当に……え、ええいや、今日は……そ
んな……つもりは……で、でもそうだな。秋がそこ
まで言うなら、私も……」

「何を勘違いしてるんですか。いいから、顔を隠してないでこつちを見て下さい」

今更とは思うが、耳まで真っ赤にしてこんなにも初心だつたろうかと疑問に思う。まあ、でも目の前でいきなり脱がれたらそりやビックリするか。寧ろ、慣れていた方が……なんか腹立つし。

「へ……み、見ても……いいのか？本当に見るぞ？」

「……いいから、早くして下さい。結構恥ずかしいんですよ」

幾ら翼で上半身を隠しているとは言え、恥ずかしいものは恥ずかしい。一応、対魔忍スースは淫魔化用に背中が開いてるが、着る余裕なんて無かつたからこうするしかない。

何度も確認し、漸く決心が着いたのか、俺の声で恐る恐るこちらを見遣る凜子さん。何処か期待したような、それでいて緊張した面持ちだつたが、俺の姿を視認すると目を見開いた。

「夢では……なかつたのだな」

「……まあ、はい」

「……夢だと思われてたのか。あの状況で夢つて……いや、気持ちは分からなくもないけどさ。そこまで神妙な顔付きになるのだろうか？」

あと、シリアルズに見せ掛けて、翼に隠れた俺の胸をガン見するのやめて。眞面目な顔なのに、目が一切ブレないんですけど。

「……その……すまなかつた」

「…………え、どうして謝るんです？」

「あの夜、お前には……その……かなり酷い事をした」

あの夜……？

「…………え、待つて。もしかして、勉強中の事じやなくて、俺が寸止めされまくつた夜の話してる?えつ、え……ちょ、タンマ。」

「お……お、覚えて……いたん……ですか？」

「……覚えていたと言うより、思い出した。先日、その姿のお前を見て……その日の夜に夢で……つて、秋!」

待つて。本当に待つて。あれはダメだ。あれを覚えられてると

か・・・・・ヤバい、めっちゃ恥ずかしい。

あまりの羞恥にベッドに逃げ込み、布団に包まる。淫魔化したまんまだが、そんな事を配慮する余裕すらない。文字通り、穴があつたので入つてる状態で、傍から見れば素で恥じて いる・・・・・・・と見えるだろうが実は結構、余裕がある。

いや、確かにあの田の事を覚えられてるとか、誤算もいい所だけどさ。そんな事、どうでもよくなる程に淫魔化した所為で性欲が急激に上昇してるんだよ。

心配して近付いて来た凜子さんを布団の中に引き摺り込む程、今の俺は制御が効きそうに無い。

「しゅ、秋・・・? 大丈夫・・・・・かあ! ?」

暗いけど、流石に二人分だと布団の隙間から光が差し込み、僅かに見える。俺に覆い被さるように引き摺り込んだから、何も着けていない胸を両手で鷺掴みにされる。

す、すまない!? 今、退くか・・・

「… んあ
… ら」

突然の事態に、早くも状況を把握した凜子さんは慌てて退こうとするが・・・手に力を入れて俺の薄い胸が揉まれる。

なつてしまい、思わず声が出てしまう。

その声は一瞬破裂する凧(ひこう)たてたが、自分が何をしているのか、瞬時に理解して、今度は布団を捲る程の勢いで起き上がった。

「あつ、あつ・・・えつと・・・すまないつ・・・!?

「ん
・
・
・
だめ
・
・
・」

馬乗りとなつた凜子さんを逃がさないように尻尾で巻き付ける。

本気を出せば、この程度の拘束など一息で解けるだろうが……どうやら媚薬の効果が効いてきたのか、その瞳に逃げる意思は欠片も感じられない。

なんせ、細工をした花瓶が真横に飾つてあるのだ。無味無臭とは言え、その効力は濃くなっている筈だ。

きっと、今から俺は性欲の赴くままに犯され尽くすだろう。やめてと泣き叫んでも許してもらえず、力尽くで何度も何度もイカされ、孕まされる。

尊厳という尊厳を踏み躡られ、明日の朝には清い所など一つとして無くなるまであらゆる場所を堪能されるに決まってる。

・・・・・それでも俺は・・・それを想像してちんぽが一層固くなる。ショートパンツと太腿の隙間から顔を出し、直接凜子さんのズボンに擦り付けてしまう。普段ならその痴態を恥じ入るのだろうが、今の俺は寧ろ誘うように腰を擦り寄せ、その存在を主張する。

男の勃起は前世で言う所の女性がおまんこを濡らしているのと同義。事実、尿道の中はもうおツユでトロトロに解れています。

例え、処女だとしても俺が興奮しているくらい、ここまですれば凜子さんだって理解する。後は……凜子さんにおまかせ、かな。

「・・・・・」
「・・・・・♡」

固唾を飲む音が聞こえ、『ああ、遂に我慢の限界か』と胸が高鳴る。ちんぽに仄かに感じる湿り気がそれをより実感させて来て、思わず翼を開いてパタパタと忙しなく動かし、尻尾の拘束を強めてしまう。

凜子さんの右手が上げられる。

今から俺を蹂躪する尖兵となるであろうその手に目が離せなくて、熱の籠つた視線で追い掛ける。

ゆつくり、ゆつくりと伸びさせたその右手が近付いて来るのに比例して、俺の胸も高鳴っていく。

あと少し。あと少しでその手と俺の体が触れ合う。あと十数センチ・・・あと数センチ・・・・・・そこで凜子さんの手は止まり、横に飾つてある花瓶を掴んだ。

「……………え……」

「ふむ、これだな。それから・・・紅茶にも何か淹れたな?」

心臓が止まつた気がした。あれだけ火照っていた身体が冷水をぶつ掛けられた様に熱を失い、冷や汗が背中を伝う。

あまりの出来事に、尻尾は力無く拘束を緩め・・・・いや、そもそもの淫魔化が解除されていく。皮肉にも快楽に溺れていた身体は、焦りや恐怖により、文字通り快楽を失う事でその制御を取り戻したのだ。

だが・・・それがなんだと言うのか。

呼吸すら危うい状態の俺など露程も気にせず、凜子さんは続ける。

「お前に散々迷惑を掛けてしまったあの任務以来、媚薬に対する訓練は相当積んだからな。それでなくとも、つい最近まで快楽に悩まされていた身体だ。制御が効く今、この程度なら理性を保つ事など造作もない

「……………え……………あ……………ちがつ…………」

何を言いたいのか、何を考えているのか。俺自身も分からぬけれど、それでも嫌われたくないからと、こちらを鋭く睨むその視線に弁解しようとする。

・・・・・・だけど、俺のやつた事は弁解の余地など無い程にどうしようもなく事実で、バレた今となつては嘘を重ねる程に嫌われてしまう。

結果、俺が出来たのは無意味に口をパクパクし、意味の無い言葉を

零す事くらいだつた。

「…秋、お前がどういうつもりでこんな事をしたのか、私には分からぬ。だけど…私は、お前とそういう事をする関係になりたい訳じやないんだ」

「あ…いや…待つ…！」

重さが消える。俺を抑え付けていた、安心させてくれていた身体が俺の上から消える。

部屋を出て行こうとするその背中に手を伸ばす。行かないでと抱き着いてでも止めようとするが…感情がごちや混ぜのあまり、力が入らなくて、ベッドの上に倒れ込む。

いつもなら、こんな状態の俺を放つておく事は無くて、即座に心配して駆け寄つて来るのに…無情にもその背はこちらを突き放すように遠ざかる。

「…すまない」

その一言を残し、凜子さんは扉の奥へと消えて行つた。



凜子さんに薬を盛つた。

例えそれが、相手の判断力を僅かに弱らせ、性欲を発散させなれば身体に籠もり続けるような、雰囲気作り程度の効力しかなく、殆ど自分の身体任せのアロマやお香程度の薬であつたとしても、『薬を盛つた』という事実は変わらない。

薬の力を使って、本人の意思とは無関係にその肢体を貪る。

それは俺が見下す存在、糞にも劣る外道共蔑んだ者達と全く同じやり口だつた。罵倒されても仕方無かつた。暴力に訴えられても何もやり返せない。

なのに・・・凜子さんはただ立ち去るだけだつた。けれど、その瞳は怒りのような、なんらかの激情を押さえ込んでいて・・・それが一体何から来る感情なのか、嫌でも分かつてしまつた。

裏切つたのだ。凜子さんの信頼を

その事実が・・・どうしようもなく、重く申し掛る。

やるべきではなかつた。やつてはいけない事だつた。考えれば、考
える程に後悔の念が溢れ出す。

胸が張り裂けそうで、溢れる涙が止まらなくて・・・声にならない叫びが喉を痛める。

何一つ快樂を感じないので、ちんぽは変わらず勃ち続ける。

それから俺の罪を象徴しているようで
なんて浅ましいのかと自分を
羨ます。

• • • • • • • • •

もう泣く力も、声を出す力も無くて、死んだようにベッドで横になる。泣き疲れて瞳を閉じようとしても、去つて行く凜子さんが脳裏に浮かび、その恐怖に目を閉じれない。

何をするでもなく、ただ延々と先の出来事が頭を巡る。思い出したくないのに、傷付くだけなのに、そう思えば思う程に強く鮮明に思い出す。

『お前とそういう事をする関係になりたい訳じやない』

去り際に放つた一言。

それが本當だと言うのなら、今までの情事は一体何だつたと言うのか。確かに最初は罪滅ぼしだつた。性欲を発散させるだけの、身体を

重ねてすらいない清い関係だつた。

それでも・・・それでもさあ・・・好きつて・・・言つてくれた
じやん。子作りしよつて、言つてくれたじやん。

嬉しかつたんだよ。あんなに真つ直ぐ想いを伝えられたのが。

俺の姿じやない。俺自身を見ててくれて、その上で俺を好きだと
言つてくれて・・・・・本当に、嬉しかつたんだ。
なのに・・・あれは全部、嘘だつたの?

「・・・・・・・・・あ・・・・」

違う。違う違う違う!!

嘘を吐いたのは俺の方だ。優しいあの人に嘘を吐かせたのは俺の
方なんだ。俺が薬なんて盛るから、俺が先に裏切つたから、凜子さん
は・・・・・・

「・・・・・・は・・・・・・はは・・・・」

どうしたら、許してくれるのだろうか。

どうしたら、償えると言うのだろうか。

元の関係には・・・・・きつと、もう戻れない。

浅ましい淫魔らしく、性奴隸としてあの人を使つてもらうなんてど
うだらうか。使つて、使い倒して、飽きるまで道具のように使い潰さ
れて、飽きたらその辺に捨てられる。
何處までも惨めな存在に堕ちたら、それで許してもらえるのだろう
か。

・・・・・・いや、無いな。

ああ見えて、弟が思う通りに淑女な人だ。きっと、同情されて余計
に苦しめるのがオチだ。

そもそも最初に出た案がコレとか、もうホント・・・・・終わつ
てるよ。

この調子だと、何をしても逆効果。無意識に淫魔としての本能に突

き動かされ、また取り返しの付かない事をしてしまった。良かれと思つた事が全て裏目に出で、余計に凜子さんを傷付かせる。

なら、もういつそ……あの人の前から、消えてしまおうか。

達郎の献身

どうせ消えるなら早い方が良い。

そう思つても、泣くというのはかなりの体力を消耗するらしく、気付けば日付が二日も変わつていた。泣き疲れて眠るなんて経験初めてだから、結構な衝撃だ。まるでタイムスリップしたみたい。

窓を開け放しにしていたから、窓枠に停まる雀の^{ささえず}囀りで目が覚めた。空を見たら、ドンヨリと曇つていて朝から気が沈む。

体力は回復したものの、精神面はそうもいかない。ふとした拍子に一昨日の事を思い出して、堪らず涙が溢れ出しそうになる。でも、いつまでも泣いてなんかいられないから、乱暴に拭つて切り替える。ふらり、と倒れそうになりながらも立ち上がって、対魔忍スースを手に取る。足を通して、腰まで上げた所で無意識に出していた尻尾に引っ掛けてしまった。こんな心境でも性欲が衰えない自身の浅ましさに更に気分が落ち込む。

いつもなら少し意識するだけで解ける淫魔化もどうしてか、こんな日に限つて中々解けない。あの人に捨てられても尚、未練がましくあの人への身体を求める己に反吐が出る。

「・・・・・」

漸く着替え終わり、部屋を一瞥する。今日で見るのは最後になるだろうから、少し名残惜しい。ゆきかぜ達に何か一言を・・・とも思つたが今は誰にも会いたくないから、書き置きだけ残そう。

内容は・・・・・探さないで下さい、とか？

もつと何か書くべきなのだろうけど、そこまで気力が無いので適当に達郎との仲とか書いてテーブルに置く。他にやる事は・・・特に無いかな。

水城家は洋館なので部屋の前までは普通に土足で入るから、靴の心配は無い。靴を履いたまま部屋に戻り、いつもの脇差を懐に。それから、後は・・・・何が要るんだ。ああ、お金忘れてた。

それで・・・・まあ、そんな多く持つても仕方無いか。

準備が出来たので窓に近寄る。停まっていた鳥が飛び立ち、開きつ放しだった窓枠に今度は俺が飛び乗る。ここは三階だから一般人が飛び降りれば普通に死ぬか大怪我だ。

だがビルを飛び回るのがデフォルトの移動方法である対魔忍からすれば、特段問題は無い。

空中に飛び飛びに水の足場を形成し、それ目掛けて窓枠を蹴ろうとして・・・・何かに手を引っ張られ、部屋に引き戻された。

「ちよ、何やつてんの！」

「え・・・・うわっ!?」

俺を引っ張った張本人、凜子さんの実の弟である達郎が何故ここに居るのかを聞く暇すら無く、部屋の中に倒れ込む。達郎を下敷きにする形になってしまい、苦しそうにしてたので慌てて退き、安否を確認する。

どうやら、怪我はして無さそうで安心した。だけど、どうして達郎がここに居るのだろうか？

「昨日ゆきがぜに頼まれて、なんか嫌な予感がするから朝早くに来てみれば・・・一体、何しようとしてたのさ！」

俺の困惑した顔を見て何か察したのか、怒鳴りながら説明をしてくる。

何をしていたも何も、家出をしようとしていただけだ。もしかして、俺が投身自殺をするとでも思ったのだろうか？自分が捨てた後に俺がそんな事をすれば、凜子さんが変に気負うだろうから、そんな事する筈がないのに。

「馬鹿！巫山戯んな！秋が居なくなつたら、姉さんが悲しむだろうが

!!

「え・・・・・・・・」

その言葉に違和感を覚えた。

コイツは姉も含めて、自他共に認めるブラコンであり、大切な姉に近付く俺を目の敵にしていたのでは無かつたのか。姉が悲しむというのなら、普段の態度の説明が付かないし、ならば俺が居なくなるのは寧ろ大歓迎ではないのか？

それに悲しむも何も、もうあの人は・・・俺の事なんて・・・。

「で、なんで家出なんてしようとしたの？」

「・・・・・・・お前には関係無いだろ」

「あるに決まってんでしょ。姉さん、ここ最近変なんだよ。妙に浮き足立つてると言うか、突然気味悪い声で笑い出すし・・・。絶対、秋関連で何かあつたでしょ」

「・・・・・・・」

え、銳過ぎない？達郎ってこんなに勘が良い子だったつけ？

それに凜子さんに関しては、あの人気が喜びそうな事なんて俺には・・・・・もしかして、俺から解放されて気が楽になつたとか、そういう・・・・・。はあ、実の弟から言われると現実味が帶びてきて思つたよりショックだな。俺つて無意識にあの人を束縛でもしてたのだろうか。

ああ、ヤバいな。また泣きそうになつて來た。あんなに泣いたのに、もう枯れ果てたと思つてたのに・・・・・なんで・・・なんでツ・・・止まんないんだよオ・・・！」

「・・・はあ。ほら、何があつたのかは大体察したから、泣き止みなよ。大丈夫、姉さんは秋の事を嫌つてなんかいないよ」

「う・・・うう、・・・ぐすつ・・・・・ほんと？」

「本当だよ。大方、淫魔の力が暴走でもして姉さんを誘惑したけど断

られたとか、そんな感じでしょ？」

…………え、怖つ。全部当たつてるんですけど。涙が一瞬で引っ込んだわ。もしかして見てた？遂に達郎にも凜子さんみたいな覗き見出来る忍法が目覚めたのか？

……ん？ちょっと待つて。なんか今、普通に俺が淫魔だつて事を受け入れてなかつたか？それどころか、なんか前々から知つてたような口振りだつたんだけど……。

「…………い、いつから……知つてたんだ？」

「まだ不知火さんが居た頃」

「…………」

あの人気が居たつて事は…………俺が淫魔の力に目覚めた時、つまりはゆきかぜの母親に襲われた時な訳で……そつか、見られてたのか。マジかよ。

「…………なんで、黙つてたんだ？」

「この話題にはあまり触れて欲しくないんでしょ？だから、自分なりに調べて色々とフォローしてたんだよ」

「フォロー…………」

もしかしてだけど、ゆきかぜと俺のスキンシップを阻止したり、俺と凜子さんの距離が縮まつたのに気付いて、監視の如く付き纏い出したのつて…………全部、俺の為？嫉妬心とかでは無く？

「昨日なんて驚いたよ。騒がしいと思つたら、秋は淫魔化してるし、姉さんはなんか発情してたし。もう全てが手遅れかと思つて頭がパニックになつた。お陰でフォローの1つも出来ず、気付けば意味不明な方向に悪化してるし」

「…………ごめんなさい」

「淫魔は性欲が凄いって聞いたから、生理が重くならないように色々と配慮してるのにさ。秋は懲りずに姉さんとイチャイチャして、それで生理当日になつたら姉さんに辛く当たつて傷付けて。それを淫魔化して慰めようとするとかマジでなんなの？ねえ？」

「……えつと、いや、その」

「あ、あれ？なんか流れが変わったぞ？」

「別に姉さんとお付き合いするのは良いよ。僕もゆきかぜと付き合ってるし。でもさ、まだ学生だよ？他の人に兔や角言うつもりは無いけど、責めて成人するまでは姉さんと清いお付き合いをしないと許さないからね。しかも淫魔の本能に飲まれて、その場の雰囲気でやるとか万死に値するから。姉さんの格をあまり下げないで」

「はい、すみません……」

「なんで俺、正座してんだろ。

「それにね、秋は気付いて無いかもだけど。ゆきかぜ、秋の事を完全にそういう目で見てるから。その辺、もつと自覚してよね。恋人居るのに他の男に発情して自慰するとか、ゆきかぜ割と節操無いんだから」「え？いや、だからそれはただの……」

「ただの……何？」

「いえ、なんでもありません」

「……ふふつ、怖い。

「……ふと思つたんだが」

「ん、何か質問でも？」

「達郎つて、意外とそういうエロに関する知識つて豊富なんだな。今までずっと初心だと思ってた。もしかしてムツツリなのか？」

今

「…………」

な、なんか達郎の目が一段と冷めた。なにか俺、マズイ事言つただろうか。

「はああ・・・・・・あのね。秋はよく実習をサボつてゐるから知らないだろうけど、普通に授業で習うんだよ。それに姉さんの本を拝借して勉強もしてたの。僕も対魔忍だから、そういう任務もいすれば任されるだろしね。僕には力が無いんだから、何も知らずに潜入して騙されて娼婦堕ちしました、だと、ゆきかぜに顔向け出来ないよ。間違つてもムツツリでは決してないから」

「・・・そつか」

言われてみれば、オナニーのやり方とか教わつてたから、そういうガチなのも何回か授業でしてたのか。内容が酷過ぎて頻繁に机か保健室で寝込んでたからなあ。前世で保健の授業の時に男女が分かれても理由つてこういう事なんだろうか・・・・・いや、流石にここまで酷くは無いか。

・・・・・もしかして、俺だけ特別授業あつたのつてサボつてたのが原因か？でも、ふうまは受けてなかつたし・・・うーん。

まあ、それは置いといて。達郎つて意外と色々考えてたんだな。てか、今では灰となつた凜子さんのコレクションを見たのか。余計なお世話かもしれないが、知識が偏り過ぎたりはしないだろうか。仮に潜入したら、無自覚なドM製造機になりそうな予感。

「話が逸れたけど、姉さんはまだ現状を上手く把握出来ずに居る。きつと今頃、『淫魔の催淫に耐えた私を見て、秋が惚れ直した』とか。そういう的外れな事を考えてるよ」

「え・・・」

あの人、そんな理由で耐え切つたのか。処女拗らせ過ぎではなかろうか。あそこは寧ろガツツいてくれた方が・・・。

でもそつかあ。俺の誘惑、そんな理由で耐え切られたのか。自分で言うのも何だけど、今更好感度が上下した所で大差無いんだけどなあ。

「でもこの誤解を解くとなると、今度は姉さんが羞恥心やらなんやらでまた面倒な事になるから、今後は誤解を解かずに受け入れて姉さんと接して」

「……つまり？」

「秋が姉さんを惚れ直して今まで以上に『デレデレ』になるの。演技とは言え、それくらいは簡単でしょ？」

「……べ、別に『デレ』では無いんですけど。まるで今までバカツップルだったみたいな言い方はやめてくれないか」

「そういうのいいから、分かつたら返事」

「……一応聞くけど、『デレ』るつて具体的に何をすればいいんだ？身体的な接触を増やしたら本末転倒だろうし」

「ん、それもそつか。……その前に、一つ確認しておきたいことがある」

「な、なんだ？」

「最近、姉さんと二人つきりになる事が多かつたけど、何してたの？」

「……」

「あー、なるほど。それはまだ知らないのか。

「……え、これ俺が説明しないといけない感じ？ここまで清い付き合いを力説して来て、絶賛ブチギレてる達郎に『もう既に色々と手遅れです』って言うのか？」

「……終わったな。

「……お、怒らない？」

「……何が？」

「……その……か、仮に変な事をしてたつて、俺が今ここで白状しても……怒らない？」

「……大体察したけど、しつかりと詳細を話して。じゃないと怒る」

「……はい」

圧が増し、目が全く笑つてない笑顔を前に簡単に屈した俺は達郎が望む通り、俺と凜子さんがどのような経緯で今の関係に至つたかをビクビク怯えながら説明した。

その間、達郎は目を閉じたまま終始無言で話を聞き、まるで嵐の前の静けさのようで酷く不気味だった。

粗方の説明をし終え、ゆっくりと目を開く達郎。口を開くのを死刑囚のような心境で待つ俺に、達郎はゆっくりと口を開き……。

「はああああ……」

深い深い溜め息を吐いた。

「た、達郎……？」

想定外の反応にどう反応していいか分からず、声を掛けたが達郎は顔を片手で抑えて何やら疲れた様子。

少なくとも怒つてはいなさそうでホッと一安心。けれど、また何か逆鱗に触れて怒鳴られると思うと身体が緊張で強ばってしまう。

「……取り敢えず、薬の方は僕がなんとかする。だから、もうそんな身体を売るような真似はやめて」

「え……う、うん」

いや、身体を売つてたとか、そんな人聞きの悪い事をしてたつもりは無いんだが……それよりも。

「……何、どうかしたの？」

「い、いや……怒らない……のかなあ、つて」

「は？ 怒つて欲しいの？」

「いや、怒らないで……」

なんなら、凛子さんとかなりエロエロな事をしたという一番怒られそうな事実も伝えた筈なんだけど、意外と怒つてなさそう。達郎、シスコンじやなかつたのか？

「今日は全面的に姉さんに非があるし、僕も少なからず関わつてたみたいだしね。それに僕は姉さんが大切なだけで、そういう性的興奮は覚えないから。”love”じゃなくて、”very like”なだけ」

「あ、はい」

日本語を達郎なりに直訳しただけなんだろうけど、”very like”って好きつて意味じや無いんだよな……下手に刺激したくないから黙つとこ。

「……で、そろそろ返事欲しいんだけど」「……？」

「なに首傾げてんのさ。演技の話だよ」

「あ、ああ！……うん、出来るか分かんないけど、やってみる」「出来るかどうかじやない。やれ」「やります」

意外と面白そだから、なんて軽い気持ちで返事したらまた怒らせてしまつた。仕方無いとは言え、凛子さんに嘘を吐く形になるのが許せないのかな。

だから、達郎なりに妥協出来たのが、巫山戯半分じやなくて真面目にやる事。つまり……これ、凛子さんに“テレてるのが演技だつてバレたら、達郎に殺されやしないだろうか。



一通り話し終え、二日も部屋に籠りつ切りだつたので心配を掛けたであろう爺やにまずは無事を知らせに行く。飲まず食わずだつたら、流石にお腹が空いたな。

達郎も朝を抜いて直行して来たらしいから、一緒にどうかと誘つてみたが凜子さんの朝食がまだなので帰つて食べると断られた。

あの人、普通に料理出来る筈だけど、そこは譲れないらしい。そう言えば、コイツは重度のシスコンだつたわ。とは言え、世話になつたので玄関まで見送りするくらいは許してくれた。

達郎より少し前を歩き、先導するような形で廊下を歩いている矢先、脇の扉が開き、そこから寝起きのゆきかぜが出て来た。

「…………!? 秋!!」

寝惚け眼をカッと開き、こちらに飛び込んで来る。

それを胸で受け止め、ゆきかぜは達郎にも気付かず、嬉しそうにぐりぐりと頭を擦り付けて來るので、随分心配させたみたいだと謝罪の意を込めて撫でようとして……背後の殺気に気が付いた。

「大丈夫? 二日も部屋から出て来ないから、凄い心配したのよ? 何処も悪い所は無い?」

「だ、大丈夫……。大丈夫だから、一旦落ち着いて……」

「……ゆきかぜ、近過ぎ」

潤んだ瞳でこちらを見上げ、目と鼻の先程の距離で安否を確認して来る。それだけではまだ安心出来ないのか、ぺたぺたと触診しだしたゆきかぜに達郎が止めに掛かる。

そこで漸く達郎の存在に気付いたらしくゆきかぜは、達郎が居る事に驚きつつも素直に従つて俺から離れた。

(さつき言つた事、もう忘れたの?)

(いや、覚えてる!だから、そんな睨まないで……)

アイコンタクトで叱責して来る達郎に身を縮こませ、ゆきかぜにバレないように必死に謝る。これからはゆきかぜとの接し方を少し考え直した方が良さそうだな。主に俺の身の安全の為に。

「それじゃ、僕はそろそろ帰るから。…………ゆきかぜ、またね」

「あ、うん。じゃあね、達郎。…………ねえ、秋。達郎、結局なんで来てたの?」

「え?…………あー…………まあ、色々とあつたんだよ」

「何よそれ?…………まあ、いいわ。早く爺やにも秋の安否を知らせましょ。昨日なんて、何回も秋の部屋の前で行つたり来たりしてたんだから」

それは……なんというか、相当心配を掛けたな。不老不死の癖にボケ始めるくらいには老いてるから、早く安心させて上げなければ。



その後は爺やがわんわん泣きながら、全身の骨が折れそうな程強く抱き締められたりしたものの、朝食食べて少しそすればいつもの日常が戻つて來た。

悩みの種であつた凜子さんの事も勘違いだと分かった今、変に気に病む必要は無く、寧ろ氣にするべき事はその対応だ。

どのように接すれば良いのか、出会つた時はなんて挨拶をすればいいだろうか。色々な案を出してはその後の展開を妄想してベッドの上でゴロゴロしたり、達郎の忠告を思い出して自制したり、すぐエロ方面に持つて行く自分にショックを受けたり。

結構忙しい一日を過ごした翌日、遂に邂逅の時が來た。

「り、凜子さん！」

「・・・ああ、秋か。どうした？」

俺の声に振り返った凜子さんは、なんか普段の三割増しでキリツとしてた。凡人がやつたら滑稽なのだろうが、貴女がそんな顔したら普通に顔が良いのでやめてください。

ほら、周囲の登校中の男子生徒が熱い視線を向けて来る。

お願ひだから、そんなイケない顔をするのは俺と二人つきりの時だけにしてほしい。・・・・いや違う。そんな事したら、俺がもう色々とノックアウトしてしまう。それはダメだ。

あ、でもこんなに良い顔が見れないのは嫌だな。達郎と同伴とかなら、見せてもらつても・・・・だから違う！

「その・・・賭けをしませんか？」

「・・・突然だな。学生の身でそのような事に手を出したくは無いのだが・・・別にそういう訳では無いのだろう？」

「はい。・・・えつと、ちょっととした勝負みたいなものです」

「ほう・・・このタイミングということはテストの点数で勝負か。しかし、私と秋の学年では教科も科目数も違うぞ？」

「その通りです。なので俺と凜子さんの直接対決ではなく、凜子さんの順位を予想するんです。その内容ですが・・・・」

勝負の内容は簡単。成績上位勢である凜子さんが学年一位を取れたら凜子さんの勝ち。取れなかつたら俺の勝ち。ただそれだけ。勿論、忍法を使っての不正もOKとする。しかし、それは飽く迄もバレなかつたらの話。

仮にバレて全成績をゼロにされたら、それは俺の勝ち。まあ、性欲を抜きにしたら堅物な凜子さんがズルをするとも思えんが。

・・・本当は互いの順位で勝負したかつたんだけど、俺ここ数日勉強してないからな。赤点を取る事は無いだろうが、流石に凜子さんに

勝つには分が悪過ぎる。

「…………というモノです」

「ふむ。……まあ、いいだろう。特におかしな点も無ければ、どちらかが損する内容でも無いからな」

「景品は、勝った方が負けた方になんでも1つだけ言う」とを聞いてもらえる権利です。勿論、生死に関わるのはダメですが、それ以外ならなんでも大丈夫です」

「なんでも？」

「なんでも、です」

「ふむ、ふむふむ・・・むふふつ」

少しの思案顔のあと、なんか変な顔して俺の身体を舐めるように観察される。全く、そんな誘うような態度は本当にやめて欲しい。子宮（睾丸）が疼いてしまうじゃないですか。

「・・・・・」

「・・・・・えつと」

「・・・・・それだけか？」

そ、それだけ？それだけって・・・何が？なんか、凄い期待の眼差しで見られても困るんですけど。なんて答えればいいんですかね。

「え・・・あ、はい。それだけ、です。・・・・・では・・・俺は、これで・・・」

「ああ・・・」

どうして、そこでションボリするんですか。さつきまでのキリツとした凜子さんは何処へ行つたんですか。ギャップがヤバいので本当にやめて下さい。もう理性がゴリゴリ削られていくんですよ。

「…………はああ」

駆け足でその場を去つて、凜子さんが見えなくなつた所で大きく溜め息を吐く。柄にもなく緊張してしまつた。

おかしな態度は取つていなかつただろうか、ボロが出ていなかつただろうか。今まで気にした事がないようなことまで心配してしまい、余計に不安が募る。

「でも、これで……後は」

テストは今日から始まる。つまり1位ではなく、飽くまで高得点を狙う勉強をしていた凜子さんでは例え、日頃から順位が1桁台でも勝つ可能性は低い。

よつて、この賭けは出来レースのようなもの。俺の成績は関係無いので赤点回避さえすれば、別にどうでもよい。

後は、成績が張り出された時に景品の権利を使用して、その日は午前中で終わるからお昼と一緒に食べて欲しい、と誘えればいい。なんやかんや言いつつ、あの人は凄い誠実だから、賭けを叛意にすることも無いだろう。

それから1週間後、張り出された順位の前にて。

秋山凜子 1位

「あつれえええ～～・・・？」

背後から感じる、全身を這いする蛇のような視線を、必死に無視しながら俺は目の前の現実に首を傾げるのだつた。